

大戦中の小学校・中学校生活

—とくに半田での学徒動員(1945年)について—

諏訪兼位

I. はじめに

昨年(2000年)の3月に、NHK テレビで加藤周一氏は「戦争を語ることは、単に過去を語ることではない。戦争を語ることは、現在を語ることであり、未来を語ることである。」という趣旨のことを話された。

私は1935年(昭和10年)に小学校に入学した。翌年2.26事件がおこり、ついで、日中戦争がおこった。中学校1年の時に太平洋戦争がおこった。太平洋戦争が終わったのは旧制高校1年生の夏であった。すなわち、小学校時代と中学校時代はどっぷりと第2次世界大戦(日中戦争と太平洋戦争)につかっていたことになる。ことに、武士道教育の雰囲気強い鹿児島で、小学校・中学校時代を送ったので、そこでの学校生活の記録は、戦時中の学校生活のひとつの典型例と考えてよいであろう。

中学校4年生の学徒動員では、鹿児島県知覧において、特攻基地の建設に従事した。さらに中学校4年生から旧制高校1年生にかけての学徒動員では、愛知県半田市において、海軍偵察機「彩雲」の生産に従事した。

私は戦時中の鹿児島における小学校・中学校の生活の記録を書き残すことと、私の学徒動員の記録を書き残すことの意義を、冒頭の加藤周一氏の言葉のなかに見出した。

私は半田での学徒動員の折りに、3冊の学徒動員日記を書いたことはよく記憶していた。この3冊は、戦後50年以上の間に、喪失したものと思い込んでいた。ところが、3冊のうち最初の2冊が、3年前(1998年)の暮れに拙宅から見出された。その頃拙宅の改築を行なうべく、物品の整理を行っていた。その整理作業中に、見出されたのである。日記の記述は、1945年3月17日にはじまり、1945年6月17日で終わっており、93日間の記録である。丹念に書き込んであるの

で、すっかり忘れてしまったことなども、多く書き残されている。おどろいてしまった。私はこの学徒動員日記をもとに、私の半田での学徒動員生活を語ろうと思う。それが、過去を語り、現在を語り、未来を語ることになるからである。

II. 幼年時代と小学校時代

1. 私の名前

私は1928年（昭和3年）5月15日に鹿児島で生まれた。私の祖母 諏訪^{しか}至夏（諏訪兼柄次女）は1874年（明治7年）に、私の祖父 湯地信明と結婚し、湯地至夏となった。祖父 信明（24歳）は1877年（明治10年）2月、西南戦争に出陣した。祖父は熊本で負傷し、6月に鹿児島に戻った。

祖母 至夏の兄弟、諏訪兼一（24歳）と兼則（15歳）も共に西南戦争に出陣した。兼則は明治10年6月に大分県竹田の赤江村で討死し、兼一は明治10年9月に鹿児島の城山で討死した。私の父 直彦は湯地家の四男として1887年（明治20年）に生まれ、男の断絶した諏訪家の養子となった。

私の生まれる前、もし男子ならば次男となるので、父は兼則に因んで、カネノリと呼ぶ名前を考えていた。昭和3年には、昭和天皇の即位式典が行なわれた。即位の位をノリと読ませて、兼位としたのである。私の兄 兼明の名は、諏訪家伝来の兼と祖父 信明の明とに因んでいる。

2. 昭和天皇を眼近に見る

1935年（昭和10年）4月に、私は鹿児島の小学校に入学した。市尋校とよばれたこの小学校は城山の麓にあり、東に市庁、西に七高造士館、南に県立二高女があった。小学校の南東隅にあった正門をはいると、校庭がひろがり、中央に楠の大樹があった。校庭の北側には、校舎が東西方向にいくつも並んでいた。児童数は多く、2,000人規模の小学校だった。昭和10年11月には鹿児島・宮崎両県を舞台に、陸軍特別大演習が行なわれ、参謀総長の閑院宮載仁親王^{こよひと}は、わが市尋校を宿所とされた。カイゼル髭で有名だった親王の記憶は定かではない。しかし、昭和天皇を割合近距離で目撃した記憶は鮮明に残っている。

照国神社から東にのびる道路沿いには、敷かれたごぞの上に、羽織袴に正装した多くの老人達が正座して、昭和天皇の車の近づくのを待っていた。私はその近くに立っていた。先触れのオートバイが何台か通過し、機関銃を備えつけたサイドカーが通過し、次に昭和天皇の黒塗りの立派な車が近づいてきた。天皇の車の右前・左前・右後・左後には、軽機関銃を備えつけたサイドカーが4台、ぴたりとくっついて進んでくる。私は眼鏡をかけた軍服姿の33歳の昭和天皇をしっかりと見た。あの人が神様なんだと昭和天皇の端正な横顔をみつづけた。小学校では、天皇は^{あらひとがみ}現人神だと教えられていた。

正座していた老人達は、天皇の車が真近に近づくと一斉に土下座し、車が遠ざかるまで土下座をそのままつづけた。老人達は遠くから昭和天皇の顔を、ちらとでも見る事ができたのだろうか。小学校1年生の私は、羽織袴に正装した老人達が一斉に土下座したのを見て、驚いてしまった。

3. 2.26 事件と日中戦争

1936年（昭和11年）2月末の2.26事件の時は、すぐに号外がでた。大人達が「高橋是清さんがやられた。斎藤 実さんもやられ、渡辺錠太郎さんや岡田啓介さんもやられたらしい。」などと話しているのをきいた。大変な事件が東京でおこったらしい。事実、2.26事件の後、肅軍の名のもとに、軍部の政治支配力は著しく強化された。

1937年（昭和12年）7月7日、小学校3年生の時、盧溝橋事件がおこり、日本の全面的な中国侵略戦争がはじまった。小学校からの帰途、友人数人と一緒に「チャンコロやっつけろ」と、氣勢をあげたことをよく覚えている。中国人に対する侮蔑感は、小学生にまで植え付けられていた。

鹿児島郊外の伊敷にあった四十五連隊からは、続々と軍隊が中国大陸に出征していった。われわれ小学生は、鹿児島駅への道路わきにならび、日の丸の旗を打振りながら「萬歳・萬歳」と歓呼して、若い兵士らの出征を幾度送ったことであろうか。

逆に、戦死者が英霊として帰還し、それを出迎えることもあった。淋しい雰囲気であった。

4. 健児学舎と鹿児島の三大大行事

当時鹿児島市内には、18ヶ所の健児学舎があった。健児学舎は郷中教育（薩摩士風の教育）の中核的な教育の場であった。健児学舎では、一般の小・中学校の放課後や日曜日を中心に、文武両道の郷中教育が徹底して行なわれた。明治・大正時代までは、士族のほとんどの子弟は、いずれかの健児学舎に属していたようであるが、昭和時代になると、特に希望する者だけが、いずれかの健児学舎に属するようになった。私自身は、どの健児学舎にも属さなかった。

また当時、鹿児島には三大大行事というものがあった。まず第1は「曾我殿の傘焼き」である。毎年旧暦の5月28日（新暦の6月下旬）に、甲突川原や稲荷川原で盛大な傘焼きが行なわれた。各健児学舎では、その2・3ヶ月位前から、学舎の少年達が近在の個人の家から和傘の古いものを貰い集めた。毎年1,000本以上が集められた。数日前から、各健児学舎ごとに、傘焼きの台場が、川の中洲に造られる。曾我十郎・五郎の兄弟が富士の裾野に、父の仇 工藤祐経を討ち果した折の、狩場の松明の故事にならい、古傘を焼くのである。健児学舎の少年達が、禪ひとつの禪で台場の周りを廻りながら、「雲居にそびゆる富士が根の み雪はとけてもとけやらで 十有八年 つもりこし 恨みをはらししものがたり」という18番までつづく歌を歌うのである。鹿児島市民は西田橋あたりから、初夏の夜を彩る盛大な傘焼きを楽しんだ。

三大大行事の第2は「妙円寺詣り」である。これは旧暦の9月14日（新暦の10月中旬）に行なわれる。妙円寺は鹿児島島の西方5里の伊集院にある島津義弘の菩提寺である。廃仏毀釈で廃寺となり、徳重神社になり義弘を祭っている。義弘は朝鮮出兵で勲功をたて、関ヶ原の戦いでは、敗戦と知るや敵中突破を敢行して国に帰った。義弘の武徳をしのび、その霊を慰めるために、往復10里の道程を参拝するのが妙円寺詣りである。江戸時代は大小を差し、重い物のかついで参詣した。明治時代以降、鹿児島島の各中学校、高校、官庁、会社などはこの行事に参加するようになった。私は中学生の時、小銃をかつき「あくれど閉す雲くらく すすき苜萱そよがせて 嵐はさっと吹きわたり 万馬いななく声高し」という22番までつづく歌を歌いながら、往復10里の道程を歩いて参拝した。各健児学舎では、鎧冑や陣羽織に身をかため、ホラ貝やラッパを吹きならして参拝し、午前0時に、健児学舎の代表：大将鎧を着した総代が、冑を捧げ持つ副将を従えて祭文を奏上するのであった。

三大大行事の第3は「赤穂義臣伝輪読会」である。これは旧暦の12月14日に行なわれる。ただし、新暦でも12月14日に行なっていたように記憶している。赤穂義士が主君の仇を討った日である。赤穂義士は忠孝の華であり、武士道の華であった。その精神をしのんで、健児学舎では徹夜して、赤穂義臣伝の書籍を輪読した。また小学校でも輪読会が開かれた。小学校6年生の時、男子児童だけが夕方学校の講堂にクラス毎に集まり、蠟燭の灯のもとで輪読した。小学校での輪読会は夜9時頃には終わった。終ると甘酒が振舞われ、そして全員で南洲神社（西郷墓地）へ、「君のめぐみにくらぶれば 富士の高嶺も高からず 髪の毛よりも軽き身は 捨つとも何か惜しからん」という40番までつづく歌を歌いながら参拝するのであった。

このような徹底した武士道教育の雰囲気の中なかで、私の少年時代は過ぎていった。教育のこわさを感じずにはおられない。なお、現在でも、鹿児島三大大行事保存会の主催で、「曾我殿の傘焼き」は1ヶ所の台場で、有志の健児学舎によって行われているようである。また、「妙円寺詣り」も昔よりもずい分と小規模にはなったが、続けられているようである。「赤穂義臣伝輪読会」も有志の健児学舎によって行なわれているが、徹夜ではなくて午後11時頃には終るようである（鹿児島市学舎連合会、1970）。鹿児島島の風土を感じずにはおられない。

5. 図画・登山・水泳

武士道教育の雰囲気の中なかでの少年時代ではあったが、毎日々は結構楽しいものであった。決してじめじめしていたわけではない。

鹿児島の子供たちは山を描くといえば、みんな申し合わせたように、まず下辺の長い台形を描き、上辺に鋭いのこぎりの歯のような刻みをいれる。右上隅にお日さまが輝き台形の下辺は海に接する。この山の絵は桜島をモデルとしたものである。桜島はときたま怒り出して、巨大な噴煙

を中天高く上げる。私は大きい山はすべて、噴火するものだと思いこんでいた。小学校2年生から4年生までの3年間、クラス担任が図画の渡邊勝海先生だったので、図画が一層好きになった(諏訪, 1995)。

桜島には向かって左から右へ、北岳、中岳、南岳が並ぶ。南岳は活動的で噴煙を上げるが、北岳はおとなしい。小学校5年生の時、海拔1,100mの桜島北岳に登った。のこぎりの齒にあたる頂上近くは、ぐさぐさの火山灰で、登っては滑り落ち、さんざん苦勞してやっと頂上にたどりついた。遠くから描いていた山が、こんなにも大きかったのかとびっくりした。まるで小さな体全体で山をスケッチしたような感激だった。

小学校6年生の時は霧島の高千穂峯に登った。頂上には、神話にある天の逆鋒が^{あま}困のなかで錆びていた。天孫降臨の象徴というわけである。頂上には風変りな老人が一人居た。われわれは萬歳のかわりに「弥栄」と叫ばされた。私が高千穂峯に登った1940年(昭和15年)は、皇紀紀元2600年と教えられていた。日本中が紀元2600年だと湧き立っていた。

図画の好きだった私は、中学校に入学した時、将来東京美術学校(現 東京芸大)へ進もうと考えていた。しかし、戦争がはげしくなるにつれ、理科に進もうと思うようになった。後年私が地球科学を専攻するきっかけとなったのは、この桜島の存在と寺田寅彦の著作であった。

小学校3年生から6年生までの4年間、毎夏1ヶ月間、鹿児島県の北の磯浜で、系統游泳協会の水泳講習会を受けたのも楽しい思い出である。金槌少年がとにかく自由に泳げるようになった喜びは大きかった。中学校に入ってすぐ水泳のテストがあり、白帽に黒線1本の2級と認定された。中学校では、全く泳げない者は赤帽、ついで白帽に赤線1本(6級)・2本(5級)・3本(4級)・4本(3級)と昇級し、そして黒線1本(2級)・2本(1級)となるのであった。系統游泳協会の会長は親戚の黒田清光氏であった。同氏は天文2年(1533年)黒田頼定を始祖とする神統流の第16代宗家師範であった(黒田清定, 2000)。同氏は昭和13年日中戦争の折、揚水江を泳ぎ渡って、部隊の窮地を救った勇士として、当時鹿児島では有名であった。系統游泳協会の游泳修業證書は、毎年最終日の8月25日に授与された。その日は日焼けを競う黒ん坊大会があった。私は毎年すぐ落選してしまった。日焼けしない体質をうらめしく思ったものである。その日は、母と姉が必ず来てくれた。みんなで一緒にジャンボ(両棒餅)をたらふく頬張った。とろりとした味は格別だった。

Ⅲ. 中学校時代

1. 一中入学と太平洋戦争

1941年(昭和16年)4月に、私は鹿児島一中(現 鶴丸高校)に入学した。一学年に250名が入学し、甲・乙・丙・丁・戊の5組にわかれた。質実剛健が校風であった。素足に黒い鼻緒の杉

下駄をはき、学用品はすべて白風呂敷に包み腕にかかえて登校した。学校内では、教練の時以外は素足で行動した。春夏秋冬、毎朝の朝礼では、全校生徒は上半身裸になって裸体操を行なった。寒風のなかの冬の裸体操はきびしかった。

海軍兵学校、陸軍士官学校、高等学校（七高、一高、五高など）、高等専門学校（商・工・農・医）などに進学する者が多かった。海軍兵学校の入学者数を、東京府立四中と競い合っていた。1943年（昭和18年）には鹿児島一中が1位、東京府立四中が2位となり、校庭でわれわれは歓声をあげた。

英語・数学・国語・漢文の4課目の教育に重点がおかれていた。ことに英語教育には熱心で、月曜日から土曜日まで、毎日1時間英語の授業があった。私たちのクラスは、小田辰巳先生に英語を教えていただいた。そのほか、教練・体操・武道・作業にも熱心な中学校であった。

一中にはいって間もなく書画部にはいり、桜島などのスケッチをつづけた。6月には書画部の悪童ばかりで、桜島にスケッチ旅行を試みた。びわ畑にはいりこみ腰をおろしたが、目の前には、おいしそうなびわがたわわに実っている。まずはみんなで試食（盗食）することにした。実にうまい。盗食に夢中になったころ、村人の近付く気配。悪童一同青くなって、手早く食いちらかしたびわの皮や種を片付けてスケッチの仕草。

近付いたのは村の老人。開口一番、

「だい（誰）かと思たら、一中ん生徒さんじゃごわはんか。よか絵をおかっきゃったもんせ」とにこにこ顔。一同、冷汗三斗。善き人に会い、すっかり調子が狂ってしまった。

1年生の7月・8月頃毎日のように、海軍の雷撃機が鹿児島市内に超低空で飛来しては、東方の桜島の方へ突込むというはげしい猛訓練を行っていた。8月も過ぎる頃、この猛訓練はピタリと終わってしまった。真珠湾によく似た地形の鹿児島で猛訓練し、12月8日の真珠湾攻撃に備えたということ、太平洋戦争が始まってからきいた。

1年生の8月には、桜島から鹿児島までの遠泳があった。桜島の北西海岸から泳ぎ出すのだが、潮に流されるので、進路を真北の加治木の方角にとる。すなわち、進路は真北から次第に北西にかわり、そして西に変わる。結局鹿児島島の磯浜まで6キロばかり、錦江湾を泳ぐこととなる。フカなどに襲われないように、何艘かの小舟が遠泳を護衛する。すぐ横の小舟には、2・3人の先生方が陣取られる。ところがわれわれが泳ぎだして間もなく、小舟の上の先生方は、

「今日は良か天気ごわすな。そろそろやいもんそかい」

などと、おおらかに語り合っ酒盛りをはじめられる。われわれはあっぶあっぶと一生懸命に平泳ぎしながら、ちらりちらりと先生方を見る。

「あーあ、先生方は優雅だなあ。おれも大きくなったら、先生になって、生徒たちの泳ぐのを見ながら、舟の上で悠然と飲んでみたいなあ」

と心底思った。

海は藍色に染み、青い空には入道雲が白くわいていた（諏訪、1996c）。

1941年（昭和16年）12月8日に太平洋戦争がはじまった。戦争開始に興奮した上級生が、校庭で氣勢をあげていたが、1年生のわれわれは割合冷静だったように思う。

1941年12月から1942年4月はじめまでの4ヶ月間、日本連合艦隊は、太平洋からインド洋にかけて行動し、無敵の勝利をつづけていた。日本陸軍もまた各地で勝利をつづけていた。マニラ占領（1942年1月2日）、シンガポール占領（1942年2月15日）、ラングーン占領（1942年3月8日）、ジャワ島占領（1942年3月9日）とつづいた。中学校1年生のわれわれは、太平洋戦争緒戦の連戦連勝に酔いしれていた。

2. 一中2年生

中学校2年生になってから、英語教育はさらに充実してきた。毎週月曜日から土曜日まで、毎日1時間英語の授業があることは、1年生の時と同じであった。おどろいたのは、3人の英語の先生が、毎週2時間づつ担当されることであった。

池田照先生はもっぱら、正規のリーダー教本によって英文和訳を教えられた。淡淡とした先生であった。前田宗男先生は英作文の教科書によって和文英訳を教えられた。英会話も兼ねるので、鹿児島一中では会作（会話作文）と呼んでいた。前田先生はアメリカの大学を出た元気な人だった。「昨日」を「ヤスタデー」と発音されるので、「ヤスタ」とか「ヤシタ」とかいう渾名がついていた。「君達は将来ニューヨーク市長やワシントン市長になるんだから、英語をしっかりと勉強するんだぞ」などとハッパをかけられた。

川井田藤助先生は英語の副読本「イソップ物語」を教えられた。1年間で全部一冊読了した。海軍兵学校教官を退官後、母校の鹿児島一中に講師として赴任された。長身瘦躯の紳士で、ユーモアたっぷりの講義は楽しかった。鹿児島では人と人が「ぶつかる」ことを「ツッゴタァ」と言う。川井田先生は「英語は鹿児島語からできたのちゃ」と冗談を言いながら、together は必ず「ツッゴタァ」と発音された。これによって生徒達は、together だけはしっかりと脳裏に刻みつけることができた。

川井田先生は夏目漱石の教え子だったらしい。級友の田良島君（1996）は、岩波版漱石全集第14巻書簡集の書簡番号691と1123の書簡2通が、海軍兵学校官舎内川井田藤助あてのものであることを見つけた。また同全集第11巻には、川井田先生の英会話の本のために、漱石の書いた序文が収録されているらしい。

われわれ一中生は、大へん力のある先生に、教えてもらっていたのである。

3. ミッドウェー海戦

ミッドウェーは中部太平洋、ハワイ諸島の西北西約2,000キロに位置する珊瑚礁の小島であり、アメリカ海軍の重要な基地である。

1942年（昭和17年）6月上旬、日本軍のミッドウェー島攻略作戦にともなって、日米の間で激しいミッドウェー海戦が戦われた。太平洋における前進警戒基地の獲得と、アメリカ太平洋艦隊に対する決戦の強要を目的として、日本軍は連合艦隊の大小艦合わせ350隻をもって出撃した。作戦に参加した飛行機1,000機、将兵10万をこえる一大出動であった。すなわち、(1) 第1機動部隊（南雲忠一中将指揮）：空母4隻、戦艦2隻、重巡2隻、軽巡1隻、駆逐艦16隻、(2) 主力部隊（山本五十六大将指揮）：戦艦7隻、重巡2隻、軽巡1隻、駆逐艦12隻、(3) 攻略部隊（近藤信竹中将指揮）：戦艦2隻、重巡6隻、軽巡2隻、駆逐艦28隻、水上機母艦2隻、輸送船16隻という陣容であった。

しかし、日本側の暗号は米軍によって解読されていた。日本軍の攻撃目標がミッドウェー島であること、作戦兵力、接近方法、攻撃予定日など、ほとんどの作戦計画がつつめけになっていた。ミッドウェー島は日本軍の侵攻に備えて着々と増強された。迎えうつ米軍は空母3隻、重巡8隻、駆逐艦18隻、潜水艦19隻などを主体とした機動部隊であった。6月4日日本の連合艦隊の一部は米軍に発見された。6月5日には、この作戦に主役を演ずるはずの日本の第1機動部隊が発見された。6月5日早暁、日本の第1機動部隊の空母4隻から、第1次ミッドウェー攻撃隊が発進し、陸上施設の攻撃を終えて帰投した。そののち、第2次攻撃隊が発進しようとしているときに、米軍の爆撃機と戦闘機が襲来した。これがミッドウェー海戦のはじまりである。6月5日いっぱい行なわれた戦闘で、日本軍は空母4隻「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」すべてを失い、さらに重巡1隻「三隈」を失った。重巡1隻「最上」が大破し、駆逐艦2隻「荒潮」「朝潮」が中破し、戦艦1隻「榛名」と駆逐艦1隻「谷風」が小破した。さらに、3,500人の兵員と322機の飛行機が失なわれた。日本軍の大敗北であった。ミッドウェー作戦は中止された。ミッドウェー島占領にあたるはずの陸軍の一木（清直）支隊は、この海戦の敗北によってグアム島に到着し、さらにガダルカナル戦がおこったので、トラック島をへてガダルカナル島に転用された。一方、米軍の被害は、軽微であった。米軍は空母1隻「ヨークタウン」と駆逐艦1隻「ハンマン」を失った。307人の兵員と179機の飛行機が失なわれ、ミッドウェー島の基地施設に若干の被害をうけた（飯塚、1972）。

この結果、日米の海軍力は逆転し、以後米軍の反攻が強まり、戦局の重要な転機となった。ミッドウェー海戦を機に、海戦が機動部隊時代にはいり、空母と飛行機による戦いになった。

このミッドウェー海戦を、日本の大本営は如何に報じたであろうか。

6月10日午後3時30分に大本営発表があった。

「東太平洋全海域に作戦中の帝国海軍部隊は、6月4日アリューシャン列島の敵據点グッチハーバー並に同列島一帯を急襲し、4日、5日両日に亘り反復之を攻撃せり、一方同5日洋心の敵根

據地ミッドウェーに対し、猛烈なる強襲を敢行すると共に、同方面に増援中の米国艦隊を捕捉猛攻を加へ、敵海上及航空兵力並に重要軍事施設に甚大なる損害を与えたり、更に同7日以後陸軍部隊と緊密なる協同の下に、アリューシャン列島の諸要点を攻略し目下尚作戦続行中なり、現在迄に判明せる戦果左の如し

1. ミッドウェー方面
 - (イ) 米航空母艦エンタープライズ型1隻及ホーネット型1隻撃沈
 - (ロ) 彼我上空に於て撃墜せる飛行機約120機
 - (ハ) 重要軍事施設爆碎
2. ダッチハーバー方面
 - (イ) 撃墜破せる飛行機14機
 - (ロ) 大型輸送船1隻撃沈
 - (ハ) 重油槽群2ヶ所、大格納庫1棟爆破炎上
3. 本作戦に於ける我が方損害
 - (イ) 航空母艦1隻喪失、同1隻大破、巡洋艦1隻大破
 - (ロ) 未帰還飛行機35機」(朝日新聞、1942.6.11.)

朝日新聞(1942.6.11.)はこの大本営発表にひきつづいて、次のような大本営発表の解説を行なった。

「北アリューシャン列島より南方ミッドウェー島にいたる、東太平洋の広大な海域を覆って、突如海軍部隊の新作戦は開始された。西太平洋において戦端をきった大東亜海戦の舞台は、一転して東太平洋の新海面に移り、太平洋全面から米海軍勢力を殲滅せずばやまぬ、わが海軍の大戦略態勢の全貌がいよいよ明かになるとともに、今次の一戦において米航空母艦勢力を殆ど零ならしめ、太平洋覇権の帰趨全く決した点に、新作戦の最大の意義が存する。…」

などと、日本国民をあおりたてたのである。

当時のわれわれは、またまたミッドウェーで、日本軍が大戦果を挙げたと大喜びしたのであった。当時の日本国民の大多数は、大本営発表こそは真実の報道であると確信していた。しかし現実には、大本営発表はミッドウェー海戦を機に、上に詳述したように、大嘘をつきはじめていたのであった。日本国民は、1945年夏の敗戦まで3年余の長きに亘って、日本国政府とそれに追随するマスコミによって、騙されつづけたのである。

当時、大本営参謀として戦争指導班長をつとめていた種村佐孝陸軍大佐は、次のような日記を残している(種村、1952)。

「昭和17年6月7日 5日からミッドウェーとアリューシャン方面にわが陸海軍部隊は出撃している筈であるが、現地からの報告はない、海外からの放送によれば、米国はミッドウェーで

大勝利を得たように盛んに宣伝している。部内には憂愁蔽い難いものがある。

昭和17年6月11日 ミッドウェーとアリューシャンのわが戦果について、きょうの新聞は一斉に記事を飾っている。ところが豈図らんや、ミッドウェーではわが海軍は大敗北を喫したのである。知らせぬは当局者、知らせぬは国民のみだ。

敢えて死児の齢を算えるのではないが、最高統帥部の考えねばならぬことは、作戦目的に対する深い考察である。ミッドウェー、アリューシャン作戦の目的は、全く不明瞭なものであった。海軍に引ずられて、これに同意した陸軍統帥部もまた大いに反省すべきである。

かくて米濠分断の大目的を有するFS作戦は、延期か中止の運命に瀕するに至った。」と。まことに沈痛な日記である。

4. 一中3年生・4年生

2年生の6月にミッドウェー海戦があり、日本海軍は大敗北を喫した。間もなく連合国軍の反撃が開始された。連合国軍とは米・英・ソ連・中国の軍隊で、太平洋戦線での連合国軍は米軍であった。1942年(昭和17年)6月16日に日本軍はガダルカナル島に上陸した。しかし米軍も8月7日にガダルカナル島に上陸した。1942年8月から約6ヶ月間、日本軍と米軍との間にはげしい争奪戦が行われた。はげしい空中戦を背景として、海上では第1次・第2次・第3次にわたるソロモン海戦、陸上では数回にわたる激戦が行われた。10月下旬には日本軍の最後の総攻撃が行われたが失敗し、11月中旬以降ガダルカナル島の日本軍は孤立した。この争奪戦は悲惨であった。日本軍は戦死者8,000人、戦病死(餓死・衰弱死)者11,000人余、計19,000人余を失った。日本は12月31日に、飢餓状態の著しいガダルカナル島を放棄することを決定した。1943年(昭和18年)2月1日・4日・7日の3回にわたり、夜陰に乗り駆逐艦による撤退作戦が行われた。撤収人員は約10,630人だった。大本営は2月9日に、「ガダルカナル島に作戦中の部隊は…其の目的を達成せるに依り、2月上旬同島を撤し他に転進せしめられたり」と発表した(林茂, 1967)。同じ頃ソヴィエトのスターリングラードでドイツ軍は全滅した。

1943年(昭和18年)4月に3年生になった。この頃から連合国軍は戦略的に攻勢に転じ、日本軍は戦略的に守勢に転じた。1943年5月29日にはアッツ島守備隊は玉砕した。1943年9月8日には、イタリアが連合国に無条件降伏した。戦局はきびしくなり、高等学校や大学などの学生・生徒の徴兵猶予が1943年10月2日に停止された。それに伴って1943年10月21日、神宮外苑で学徒出陣壮行大会が雨降るなか挙行された。その日ラジオで壮行大会のありさまをきいた。1943年12月1日にはこれらの学徒兵が入隊した。

1944年(昭和19年)4月に4年生になった。とうとう英語教育は中止されてしまった。英語は敵性語だというのである。英語の先生達は苦勞して、英語以外のシラバスを考えてこられたが、授業を受けるわれわれも切ない思いだった。シラバスに一貫性などあろうはずがなく、専門授業

の教育権を奪われた英語教師のかなしい背中を見るだけであった。2年生の時のあの生き生きとした英語の授業が、昨日のこのように思い出されるのであった。この頃すでに川井田先生は一中を退職しておられた。こんなことで、日本はこの戦争を勝ち抜くことができるのだろうかと不安になった。

1944年6月6日に、ヨーロッパ戦線の連合軍が、ノルマンディー上陸作戦を敢行した。1944年6月19・20日のマリアナ沖海戦で日本軍は惨敗した。1944年7月8日にはサイパン島が失陥し、全員が戦死した。1944年3月にはじまったインパール作戦も7月には惨敗に終わった。東條内閣も遂に総辞職した。

その頃（1944年7月頃）、先輩の牛嶋 満陸軍中將が、今から最前線に向かうというので、鹿児島一中に挨拶にこられた。全校生徒が講堂に集められ、牛嶋中將の講話をきいたが、内容は全く覚えていない。牛嶋中將は鹿児島に生まれ、一中から陸軍士官学校に進んだ人である。最前線というのは一体どこだろうかと考えたが、勿論わかるはずがない。牛嶋中將は1944年8月8日に沖縄に着任した。われわれは、翌年（1945年）6月末に、半田で、牛嶋中將の沖縄戦での最期を知ったのであった。

1944年8月10日にグアム島守備隊が全滅した。1944年8月25日、ヨーロッパでは連合軍がパリに突入した。

1944年9月17日から10月14日までの約1ヶ月間、一中の4年生と5年生は、薩摩半島南部の知覧に赴いた。知覧航空隊へ学徒動員されたのである。鹿児島二中、鹿児島市立中、鹿児島中、川辺中などの生徒も動員された。われわれのクラスは、地元の集会所に宿泊し、毎日飛行場建設予定地へ歩いて往復していた。炊事は地元の女学校生徒の勤労奉仕に頼っていた。朝5時に起床、6時朝食、7時出発、帰寮は夕方7時だった。われわれは炎天のもと、モッコとスコップの人海戦術で、飛行機を爆風などから防護する掩体壕えんたいごうを作った。クラス50人が約1ヶ月かかって、やっとひとつの掩体壕を作ることができた。掩体壕は壕と言っても地下に掘下げたものではなくて、地表に築く、一端の欠けた円環状の土堤であった。級友の田良島君（1995）は掩耐壕と書くのではないかと述べている。

級友の小野君（1996）は、知覧飛行場の建設に、やや小型のブルドーザーが使用されているのを見て大変おどろいた。小野君は「それまでの我が国の土木・建設現場でよく見かけられていた人海戦術で、ツルハシ・スコップ・モッコなどを使用した工法しか知らなかった小生には、全く新鮮なものであった。」と述べている。小野君はブルドーザーの正体を監督の兵隊に質問した。監督の兵隊は、1942年2月にシンガポールを占領した時、イギリス軍から捕獲したブルドーザーを手本にして我が国で製作したこと。製作にあたって、わが国の鉄道の貨車の寸法に合わせて作ったこと。したがって捕獲した原型よりも少し小さくなっていること。などを語ってくれた。小野君（1996）は「このような車両（ブルドーザー）を発明・製作するような敵の技術力に、身震いする思いであった。現在では何処でも常識、普遍的であるブルドーザーの存在そのものを、初

めて知ったこの出来事が、少年の日の強烈な印象として、心に深く残ったのである。」と述懐している。

私は別の兵隊から、自動小銃のすさまじい威力についてきき大変おどろいた。ガダルカナル島で米軍は自動小銃を使用して、日本軍を完全に圧倒したという話であった。

1944年10月になると、連合国軍の戦略的攻勢は益々勢を増し、日本軍は絶望的な抗戦をつづけることとなった。10月15日に、航空戦隊司令官の有馬正文海軍少将は、フィリピン東方沖で、敵の空母に向かって突入し壮絶な戦死を遂げた。49歳であった（菊村，1982）。このことが数日後の新聞に大きく報道された。有馬少将は鹿児島一中から海軍兵学校に進んだ人である。10月20日に連合国軍はレイテ島へ上陸した。そしてその10月20日に神風特別攻撃隊が編成された。有馬少将の壮絶な戦死が大きな引金になったことは疑いない。英語の甲斐貞信先生が、神風特攻隊のことを絶賛して、授業中に切々と述べられたのが印象に残っている。大学教授クラスの実力を持つ教師という定評のあった甲斐先生は、戦後立命館大学の教授になられた。

1944年10月24・25日フィリピン沖海戦で日本軍は惨敗した。11月になると、B29（アメリカ戦略爆撃機）による日本の都市爆撃が開始された。

蒲生16里マラソンという行事があった。3年生の時、1943年（昭和18年）11月6日にはじめられた行事である。午前6時に一中に集合し、6時半にスタートするのである。5人がひとつの組となって、5人揃って自力でゴールするのである。16里だから、その間走ろうと歩こうと勝手であった。級友の田良島君（1995）は「スポーツと言うよりは、将に典型的な戦時型の鍛練法であった。」と述べている。鹿児島市街地を抜け、吉田から蒲生を經由して重富を回り、磯街道を南下して一路鹿児島をめざすのである。

4年生の時は、1944年11月10日に行なわれた。小生らの5人組は割合みんな元気だった。小生は最終段階で、磯街道を何人も抜きながら強歩をつづけていた。それでも5人組のなかではビリであった。他の4人はもっと早かった。突然びっくりしたのは、5人組の1人田中 稔君が自転車を駆って磯街道を北上してきたことだった。「おい諏訪君。後にまたがれ」と言う。田中君の自転車のうしろにまたがって、およそ1キロか2キロ磯街道を南下して、鹿児島駅の近くにあった田中君の家まで乗せてもらった。実に快適であった。そこに待っていた3人と合流して、ゴールの照国神社まで5人一緒に走っていった。目出度くゴールインである。午後2時頃だったと思う。

IV. 半田での学徒動員

1. 鹿児島出発

級友の和田君（1996）が、貴重な日記を残しているので、鹿児島出発の事情がよくわかる。和

田日記は以下のものである。

「1945年（昭和20年）1月13日（土） 県（軍需省）からの命令で、1月17日に、愛知県半田市の中島飛行機半田製作所へ出発する事となった。我々が直接、皇軍将士の待っている飛行機をつくれる事は真に喜びにたえない。3時間目に動員に関する諸注意があった。大いに戦え。体当たりだ。チェスト行け。

1月15日（月） 晴のち雪 動員に関する準備のため、休日。午後諏訪君の家に寄り、市役所へ。配給停止証明書を貰う。

1月16日（火） 小雪・冷雨 午後2時より照国神社で祈願祭及び壮行式あり。お守りを戴く。明日は13時に登校し、生活必需品配給停止証明書と上級学校受験の為の旅費を持参すること。

1月17日（水） 本日、出発の予定であったが、急に延期される事になった。折角、準備したのに一部分は無駄になった。当局は、いまして注意されたし。いつ出発するのか不明なり。」

和田日記によると、1月17日（水）出発の命令が1月13日（土）に出されたことがわかる。4日間の猶予があるだけである。召集令状のあり方とよく似ている。1月17日の出発が直前に延期されたのは、実は三河地震のためであった。三河地震は1月13日（土）午前3時38分に、愛知県三河地方を襲ったマグニチュード6.8の地震であった。当時、地震は一切秘密にされていた。事情を知らないのだから、和田君ならずとも「当局は、いまして注意されたし。」と言いたくもなる。

旧制七高理科の入学試験が1月23日（火）・24日（水）・25日（木）の3日間行なわれた。しかし、前年（1944年）までのきびしい入学試験とは異なり、きびしい学科試験はなく、メンタルテストのような筆記試験と作文と口答試験といった異例の入学試験であった。1月31日（水）に合格者発表があった。幸い私は合格した。

再び和田日記を引用しよう。

「1945年2月3日（土） 晴 我々の待ちこがれていた動員の出発は8日と決定。4時限終了後、種々の通達があった。明日より、準備の為、休業を許す。

2月7日（水） 曇・晴 本日も休みなり。学校に、動員に関する掲示を見に行った。出発は8日24時08分に決定す。

2月8日（木） 曇・雨 14時より一中で壮行式あり。校長の激励の辞及びその他の諸注意あり。18時、鹿児島農林専門学校の第一次試験合格者の内報。僕の名も末席にあった。4月入学の予定で、動員には参加できない事になった。他の諸君は24時08分の列車で半田へ向け出発す。三木君と鹿児島本駅に見送りに行く。盛況を極む。興奮の余り入場券も買わず、柵を乗り越えて列車の所まで侵入、駅員の制止なし。鹿児島一中より309名出動す。鹿児島一中、鹿児島二中、鹿児島市立中、鹿児島中、川内中合計1,600名。鹿児島一中生が一番、士気旺盛な感じ。」

和田君は出発6時間前になって、動員に参加できないことがわかったわけである。われわれは2月9日午前0時08分に半田へ向って鹿児島を出発したのだった。

2月10日（土）朝 滋賀県米原につき、見事な豪雪におどろいた。南の児等のなかには深く積った雪を口にする者もいた。はじめて眼にする本格的な雪だった。

2月10日午後 名古屋駅から名古屋城を遠望し、大府を経て武豊線の乙川駅に下車し、苗代町の苗代寮に着いたのである。

2. 苗代寮と中島飛行機半田製作所

われわれ一中生は、はるばると鹿児島から、東南海および三河の両地震の、傷あとも生なましい半田へやってきた。

半田市乙川の苗代寮に到着した、2月10日の最初の夕食は、蒙古の徳王から贈られた白米御飯であった。この調子なら、かなり愉快的な動員生活を送れるぞと考えたのは、まことにあさはかであり、雑炊とわずかな米飯になやまされ、日に日に痩せ細ってゆく毎日がつづくのであった。栄養状態は悪いうえに、シラミが大量にわきだした。夜となく昼となくゾーツゾーツと這ってくる無数のシラミ、つぶしてもつぶしても根治できぬシラミの群、ペンを走らせている50年以上経った現在でも、ありありと思い出せるのである。

苗代寮のバラック1棟には、15畳の部屋が13あった。1号室は先生方の部屋、13号室は看護室だった。2号室から12号室までの11部屋にわれわれ一中生がつめこまれた。15畳の1部屋に12人がつめこまれた。当初約4ヶ月間は、瓦は葺かれていなかった。5月31日（木）になってやっと瓦が葺かれた。

われわれ鹿児島一中報国隊は、苗代寮から毎日南下して乙川の駅を過ぎ、桜並木のつづく東西にのびる堀割を越して、半田製作所の正門から、園田実信君の指揮で入門するのが常であった。

当時、半田製作所には沢山の人が働いていたが、正確な資料は焼失し、現在では、あまりはっきりしたことはわかっていない。ただ当時 彩雲組立工場長であった蘆沢俊一氏の調べによると、半田製作所の従業員数は26,000人位らしい。このうち、事務系・技術系職員2,000人余、正規工員7,000人余、徴用工4,700人余、女子挺身隊員2,100人余、動員学徒10,000人余（うち男子5,900人余、女子4,100人余）ではないかというのである。学徒動員数も正確なことはわからない。すなわち、動員年月日と学校名および学生・生徒数の明記されたものは残っているが、延人員のため正確を期すことはむずかしい。

半田製作所への動員校は関東・東海・北陸・関西・四国・九州にまでひろがっていた。高専は17校、男子中学校は26校、女学校は13校、国民学校は10校である。鹿児島県からは、鹿児島一中274人、鹿児島二中289人、川内中201人、鹿児島市立中219人、鹿児島中382人の計1,365人という記録がある。

なお、1944年（昭和19年）3月、中学生の勤労働員が決定されると、愛知県では早速1944年

4月から、中学校3年生以上の工場動員が実施された。1944年10月からは、中学校低学年と国民学校高等科まで拡大された。1945年2月、私達ははじめての職場で、半田中学校の1年生が働いているのを見てびっくりした。

さて小生らの小グループは、本工場を出て、阿久比川にかかる橋を渡って、山方工場に毎日通勤していた。ここで彩雲の脚室を作っていた。脚室というのは、飛行機が離陸した後、空気抵抗を少なくするために、車輪を格納する場所である。

山方工場は戦争中、半田製作所が紡績工場を吸収したものである。古い紡績工場の支柱や隔壁などを撤去して、飛行機の生産を行っていたために、東南海地震で工場が崩壊した。東南海地震は、1944年（昭和19年）12月7日13時36分に発生した、マグニチュード8の大きい地震であった。山方工場などでは、学徒97人を含む154人が死亡した。学徒97人のうち13人は京都三中の生徒だった。京都三中からは、俳優の田村高広氏などが来て働いていた（諏訪、1975；1996a）。

中島飛行機が半田に進出してきたのは、1942年（昭和17年）8月のことだった。115万坪の工場用地を造成し、全国有数の大学徒工場として1945年（昭和20年）7月23日まで海軍機を生産しつづけた。半田製作所で作られたのは艦上攻撃機「天山」と艦上偵察機「彩雲」であった。「天山」は1943年（昭和18年）12月8日に1号機が誕生、1945年7月までに977機が作られた。最盛期は1944年（昭和19年）10月で、1ヶ月に90機が作られた。「彩雲」は1944年6月に1号機が誕生、1945年7月までに427機が作られた。最盛期は1945年3月で、1ヶ月に64機が作られた（図1）。



図1. 艦上偵察機「彩雲」。中島飛行機半田製作所で1944年6月から1945年7月までに427機が作られた。

1945年3月31日の動員日記（諏訪）より。

ミッドウェー海戦（1942年6月）の大敗北をうけて、日本軍は索敵の重要性を強く認識した。早速開発されたのが、艦上偵察機「彩雲」であった。実戦に投入されたのは1944年夏以降で、

マリアナ、沖縄の各戦線で偵察機として活躍するのであるが、如何せん、すでに日本には空母は少なく、艦上偵察機としての使命を十分に果たすことはなかった。「我に追いつくグラマンなし…」という有名な電文で名を馳せた、「彩雲」の最大時速は609kmで、日本海軍の実用機としては最高の性能を誇った。戦闘機用の小型大馬力エンジン「誉」と三翅のプロペラ、極度に絞り込まれたスマートな胴体には、操縦士、偵察士、それに機銃手という3人が搭乗できた(田良島, 1995)。

しかし、敗戦間近の1945年6月・7月・8月になると、「彩雲」は艦上偵察機としてではなく、特攻機として使用されたいし、悲しいことであった。

結果的に私は、1944年9・10月に知覧特攻基地を建設し、そして、1945年2～7月に特攻機を生産したことになる。

3. 勤務状態

半田に着いた2月10日から半田を去る7月29日まで、およそ6ヶ月間にわたって、私は半田製作所山方工場で働いていた。しかし動員日記(諏訪, 1945a, 1945b)をみると、2月・3月・4月の3ヶ月間は、必勝の信念に燃えて懸命に働いたが、5月・6月・7月の3ヶ月間は、次第に厭戦的な気分になり、仕事をサボるようになった。動員日記の表紙を図2a, 2bに示す。

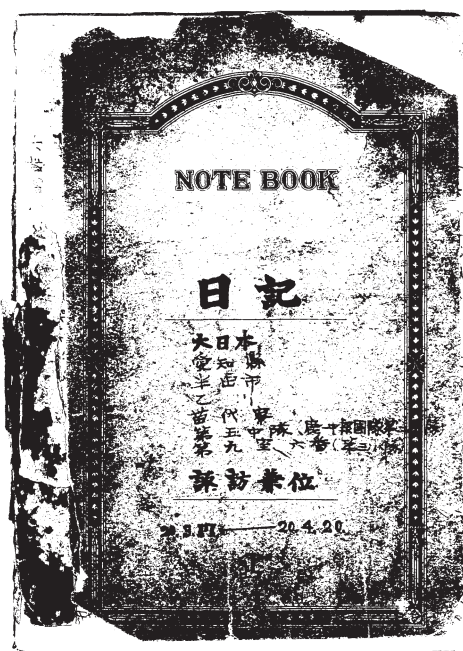


図2a 動員日記(諏訪)
1945年3月17日～1945年4月20日；
縦21cm, 横15cm

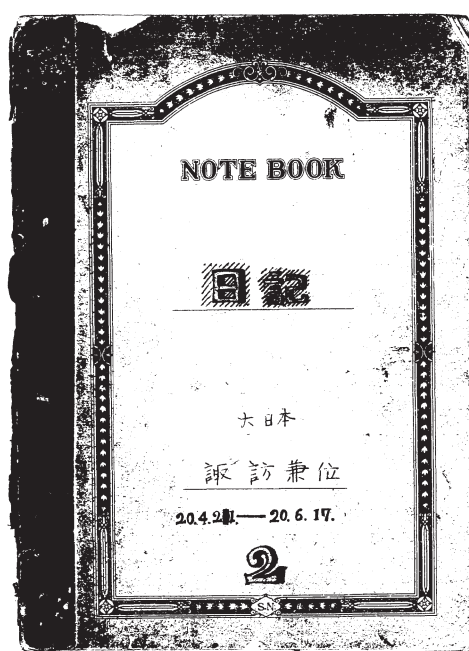


図2b 動員日記(諏訪)
1945年4月21日～1945年6月17日；
縦21cm, 横15cm

A. 勤務時間

勤務時間は昼勤（1部）と夜勤（2部）の2つに大別される。1部は5時30分起床、6時～6時30分朝食、7時25分工場入門、7時30分始業、11時30分～12時工場で昼食、17時30分終業、18時30分寮で夕食、21時消灯就寝で、実働9時間30分である。2部は10時起床、11時30分～12時寮で朝食、16時～16時30分寮で夕食、17時25分工場入門、17時30分始業、23時30分終業、23時30分～24時工場で夜食、1時消灯就寝で実働6時間である。

忙しい時には、1部突撃というのがあった。1部と17時までは変わらない。17時～17時30分工場で夕食、20時30分終業、21時30分消灯就寝で実働12時間であった。2部突撃というのもあった。2部に比べて、終業、夜食、消灯就寝が、30分づつ後へずれるので、実働6時間30分である。

4月末までは、1部突撃や2部突撃で仕事に励んだこともある。しかし、動員日記をみると、5月以降、1部突撃とか2部突撃で仕事をしたことは一切ない。おそらく5月以降、資材不足の状態になったものと考えられる。

私の動員日記は、1945年3月17日から6月17日までの93日間の記録である。この93日間のうち、公休はわずか4日だけであった。3週間に1日の公休という苛酷な労働条件であった。当時、「海の男の艦隊勤務 月・月・火・水・木・金・金」などという歌があったが、まさしくそのような労働条件であった。

また、2月10日に半田に着いてから3月16日までの5週間は、日記をつける余裕など、まるでなかったことを物語っている。鹿児島島の軍国少年は、山方工場ではじめて電気ドリルを握り、脚室組立てに必死に取組んだにちがいない。

B. 講話

動員学徒の士気を鼓舞するために、1ヶ月に1回位の割合で、大学教授や新聞記者の講話があった。

3月17日（土）は2部勤務だった。苗代寮修養室で、神宮皇学館大学 新開長英教授の「日本的死生観」と題する講話があった。おひる前の40分間、われわれは正座して真剣に講話を聞いた。講話の内容は「戦争に勝つには、必勝の信念を堅持することが必要である。そのためには、特攻隊の精神を知らねばならない。そして、死と生という問題をしっかりと把握せねばならない。死と生は紙の表裏の如きもので、生のない死もなく、死のない生もない。われわれは、目前そして足下に死があると自覚してこそ、はじめて生死の事に徹することができる。特攻隊にとって一番肝要な事は、特攻隊の人々が、後に続くを信ずると言い残して出撃したことである。自分達が死んでも、後に続く者のある限り、自分達の魂は生きるのだ。その後に残る者たる諸君は、その日その日をしっかりとやって貰いたい。今日ではなく、明日からという考えでは絶対駄目です。」とい

たものであった。この講話には、山鹿素行や松尾芭蕉も登場した。当時の私はこの講話をきいて、流石は大学教授だと感心し、「得る所大なり」と日記に書いている。

4月23日(月)も2部勤務だった。苗代寮食堂で昼食後、朝日新聞 小野 直記者の「戦局と特攻精神」と題する講話があった。講話時間は日記に書いてない。講話の内容は「かの雄弁家ヒトラーが、ドイツの青少年を前に“予は特に信頼せるドイツ青少年に呼び掛ける”と言ったあと、何も言わなかった。そこには千万言の意味が含まれている。ヒトラーはドイツの青少年に心からの期待を寄せているのだ。1944年米国は96,369機の航空機を生産した。世界第1位である。世界第3位のドイツは35,000機生産した。日本はその中間の第2位である。昭和17年2月のシンガポール占領直後、山下奉文将軍は、直ちにオーストラリアに上陸すべしと主張したが、東條首相が許さなかった。その時山下将軍は、戦機逸せりと慨嘆した。もし山下将軍の献策がうけいれられておれば、現在のような苦しい状況にはならなかったと思う。特攻隊は“身心脱落・脱落身心”の心情で出撃している。」といったものであった。当時の私はこの講話にも「得る所大なり」と書き、そして「とに角われわれは飛行機増産に奮闘しさえすればよいのだ」と日記に書いている。もっともらしい数字を並べたて、肝心のところはごまかす小野記者に、われわれはハッパをかけられた形であった。記録によれば、1944年の米国の航空機生産数は100,725機、日本のそれは28,180機であった(林 茂, 1967)。小野記者の言うような、世界第2位などではなかった。米国の30%にも満たなかった。

5月24日(木)も2部勤務だった。午後1時から約1時間半、神宮皇学館大学学生主事の高木秀一教授の「皇国体について」と題する講話があった。日記には「平凡なり」と書いてあるだけである。厭戦気分が強くなり、かなり醒めた状態にあったことがわかる。前の2回(3月17日と4月23日)とは大違いである。なお、高木秀一教授は戦後1947年10月頃自殺した。当時の私の日記(1947年10月31日)には「高木秀一氏が自殺したと最近の新聞に出ていた。高木氏は半田動員の時、色々つまらない事を話した国粹主義者である。半田では、天皇絶対を何らの科学的根拠もなく主張した。」とある。なかなか手きびしい。

C. 仕事の仲間

さて、われわれは、半田製作所山方工場で安田組(安田 昇組長)に属していた。鹿児島一中生は次のとおりである。

安楽慶蔵、芝 貞雄、諏訪兼位、高江充郎、高山 雷、田中 稔、筒井清晴、土井清造、
中村昭典、前野 明、松崎昭男

4月24日(火)の日記には、一緒に仕事をしていた人達の名前が列記されている。渾名を付記してある人もいる。渾名を見ると、55年経った今でも、面影が浮んでくる。

名工専航空科新3年生(17名)…但し、3月中旬まで一緒に仕事をした。

今井 豊(エノケン)、笠原 穰、加納 徹、川端久直、久野 孝(チンパンジー)、久野和郎、近藤守男、杉浦洋一、鈴木良孝、鷹羽善義、竹市 稔、寺田和男(秋葉アンチャン)、中川一成、西尾幸久(坊チャン)、林 茂(ニヤケボーイ)、古川真佐雄、満田造之(ミッション)

名工専建築学科新2年生(16名)

伊藤広義、大沢一喜(ヤリイカ)、各務健三、川口鐘吉(ゴケサン)、朽名幸夫(ゴリラ)、杉野道弘、高井信男(フクチャン)、玉井 実(ジャガイモ)、福田千之、本田 薫(河童)、松崎照男(ハツカネズミ)、三輪秀松(石松)、森田 定、吉田善吉、若林伸也(ガンジー)、渡辺秀夫(ロンドン乞食)

京都府立三中新4年生(2名)

岡本武衛、古荘精一

愛知県立半田中学新2年生(19名)

阿知波英雄、石川升繁、伊藤礼明、井上担平、岩田有一、川島邦夫、小栗一祐、沢田正伸、四十万 靖、杉浦伸吉、杉山嘉一、竹内貞利、竹内主光、竹内德利、土井年長、樫 裕、林 省一、福島 忠、山口時夫

日記には、「杉山君と竹内君は熱心に仕事をする」とある。ただし、竹内姓が3人もいる。

工員(6名)

男工: 安田 昇、島野甲子、小林 進、山口 晃

女工: 赤堀冬枝、増田みち

安田組には、3月中旬までは70人ほどが働き、3月中旬以降は50人ほどが働いていたことになる。

D. 授業停止

3月19日(月)は公休であった。「昼食のあと、芝君、高山君、松崎君などと共に、市内に外出し、帰途岡や川添いに散歩しながら帰る。実に気分転換になって良し。梅や桃の花を手折り、帰寮して花瓶に活く。寮の向いの岡(白山)に、明治23年3月31日に、明治天皇が陸海軍3万の兵の大演習を観た御野立所跡の碑をみつけておどろく。」と日記はなごやかである。ところが帰寮して新聞をみて愕然とした。「『来年(1946年)の4月まで国民学校から大学まで授業停止』一時落胆す。国破れてなんの勉強ぞ。いたく感ず。かほどまで戦局危急なり。」と日記にある。

実は旧制第七高等学校の授業が4月から始まるならば、3月末には鹿児島に戻れると私は考え

ていた。その考えが微塵に砕かれたショックは大きかった。

その1週間後の3月26日(月)の新聞に、授業停止に関して、京大全学生の大賛成の決議文が載った。私は日記に全文を書き写した。

『決議文』

政府は今般学園に対して、向う1ヶ年間を限り学業の停止を決定したり。これまさにわが京大全学生の鶴首待望したところにして、何ぞただに、1ヶ年の時期を劃さんや、10年可なり100年またよし。勝利を収むる日まで、われら全力をふるひて醜敵撃滅に邁進せん。内憂外患交々いたるこのとき、われら尊皇殉国の大義に徹し、蹶起攘夷の矛をふるはずして、いつの日か君国に報ずるの期あらんや。政府はよろしくわれら京大全学生をして、即刻最難の部署につかしめよ。われら必ずや皇恩に報い奉り、神州護持の礎石たらん。」

なかなかのものである。1933年の滝川事件から12年を経て、すざましいまでの京大生の変貌である。

E. 事故発生

4月3日(火)、私にとって忘れられない事故がおこった。

4月3日(火)1部。「昼前、6ミリ錐を付けた電気ドリルが左足に真直ぐに落ちて、左足背部にグサリとささり、出血多量を極め、猛烈な傷だった。すぐ山方工場の仮包帯所に芝君と行き、薬をつけてもらった。午後は少し足が痛み出したので、大部分寝たりした。友人達は、歩行困難を理由に明日は休めと言ってくれたが、自分は断乎出勤すると言った。芝君らの話では、夜うずいて寝れないとのこと。そうでないことを望む。」

4月4日(水)1部。「心配していた夜のうずきも起らず、ゆっくりと寝れた。仕事もよくやった。山方工場の仮包帯所で、薬を新しいのにかえてもらった。」

4月5日(木)1部突撃。「今日は足が腫れてきた。歩くのはきつかった。仕事は熱心にやった。」

4月9日(月)2部突撃。「雨が降ってきた。靴が濡れぬ様、左足の傷に水がかかぬ様、気を配りながら工場へ行く。幸い水はかからなかった。…夜12時、夜食をすませて帰寮。水溜りが多く難儀した。遂に水がかかった。帰寮してすぐ、包帯をとり、傷口を拭いて、ガーゼを載せ、手拭で結んで寝た。靴はびしょ濡れになった。困った事だ。」

4月10日(火)2部突撃。「雨がひどい。困った事だ。また足が腫れてきた。起床後早速寮の診療所に行った。友人達がバイ菌が入って悪寒がするといけなから、今日は休めと忠告する。隊長室で石原先生に相談する。『君はずーっと皆勤だ。少し遅れてもよいから出勤をすすめる。』と。前野君持参の破傷風に効くという煎じ薬を服用する。前野君らと雨の降るなかを、防空頭巾をつけ、オーバーを着て出掛ける。ぬかるみでは、前野君に背負ってもらう。山方工場に着く。

左足は雨で少々濡れた。工場の焚火で、左足を巻いていた手拭や包帯をとって乾かす。傷口を拭きとる。手拭や包帯が乾いてから、また傷口を巻く。…今日はあまり働かず。帰途、暗いし水溜りはあるし、随分つらかった。寮に帰り着くまで、何度も水に濡れ、本当に弱った。悪寒がこなければよいが。」

4月12日(木)2部突撃。「今日も晴。嬉しい。足の傷に晴ほど有難いものはない。…昼食後、突然、中村昭典君がアイタダレタ(ああ疲れた)と言って9号室の戸を開け、リュックを下ろした。鹿児島から寮に戻ってきたのだ。びっくりした。皆んなで中村君を取りまいて、鹿児島の状況を根掘り葉掘り聞く。一段落して寮の診療所へ行き、足の治療をしてもらう。」

4月14日(土)2部突撃。「点呼の後、中村君から足の治療をしてもらった。寮の診療所の治療よりも丁寧で良い。1週間ぐらい、中村君に治療をつづけてもらうつもりだ。中村君は『見通しがつかなければ、また診療所へ行けば良い。多分4月中には治癒するだろう。』と言う。嬉しかった。」

4月19日(木)2部突撃。「昼食頃から嫌な雨が降ってきた。足の怪我以来、自分は雨を恐れ、雨を嫌になってきた。啄木は『たんたらたら たんたらたらと雨滴が痛むあたまに ひびくかなしさ』と詠んでいる。…夕食に行く途中、足が少々濡れた。」

4月23日(月)2部。「4月中旬、苗代寮に風呂が完成し、ほとんど毎日の様に、はいることができるようになった。だが自分が入浴できないのが残念だ。4月14日以降ずっと足を中村君に治療してもらっている。」

4月27日(金)2部。「夕食前、雨が降り出した。折角傷が治りかけたのに、傷の深さも浅くなってきた。注意しながら工場へ行った。濡れずにすんだ。」

5月2日(水)1部。「左足の傷、9割治癒。」

5月7日(月)2部。「左足の傷、完癒。」

中村君の親切丁寧な治療のおかげで、私の左足の傷は完癒することができた。中村君の伯父さんは、有名な今村病院の院長 今村源一郎氏であった。中村君(1996)は次のように回想している。

「愛知県半田市に動員に行く時も、伯父がケッテルの中に、ガーゼ、綿を消毒して入れ、ヨードチンキ、オキシフル、アルコール、リパノール液、ピンセット、包帯などを持たせてくれた。動員中、工場内で怪我をした友人達を、帰寮してから消毒治療してあげた。特に忘れられないのは、諏訪兼位君がドリルを足に落して足背部に突きさした。毎日帰寮してから消毒し、リパノール液にて治療し治したことである。大阪のクラス会でも、諏訪君が君に治療してもらった創跡が未だ残っていると言っていた。ガーゼ、綿を入れたケッテルを、週1回蒸し器で消毒してくれた寮母さんを思い出す」と。

F. 給料

さて動員学徒たちは、どの程度の給料をもらっていたのであろうか。4月30日（月）の私の日記に次のような記述がある。

「今日俸給が支払われた。名工専の本田河童が一番よく働く。俸給は100円10銭だったそうだ。大沢さんは80円位だったそう。簡閲点呼のため工場に出勤できなかったからだ。あのサボリの杉野氏は71円位だった。」と。

労働評価によって、同じクラスの学生でも、俸給が異なっていたことがわかる。われわれは4月以降も中学生として処遇されていたので、俸給は支給されなかった。

私は、5月はじめから6月中旬までの間、父から3回送金してもらい、小遣金をまかなっていた。すなわち、5月4日（金）50円小為替、5月20日（日）30円小為替、6月13日（水）20円小為替、計100円であった。

G. 帝国在郷軍人

昭和21年（1946年）の4月まで、日本中の学校で授業は停止されてしまった。われわれは動員先で労働を続けるだけであらうか。実はそうではなかった。5月18日（金）の私の日記に次のような記述がある。

「今日、昭和3年（1928年）12月1日までに生まれた者は、在郷軍人の手続きをなす。自分も光栄ある帝国在郷軍人になったのだ。」と。

私は17歳になったばかりである。16歳の友達も帝国在郷軍人になった。本土決戦に備えての緊急措置だったのである。

4. 動員生活（その1）

A. 食生活

93日間の動員日記を読むと、食事のことが頻繁に登場する。何しろ腹が空くので、食べることに異常に高い関心があった。

3月18日（日）1部。「夜風呂に行く。痩せたうえにさらに痩せた。」

3月23日（金）1部。「今夕のおかずはイルカの肉でうまかった。」

3月27日（火）2部。「今日までにイルカの肉が3度食卓にのぼった。非常にうまい。」

3月29日（木）2部。「朝食は割合量が多かった。小園君・高山君・筒井君らと一緒に半田の街に出る。雑炊3杯、トコロ天1杯を頬張る。1円40銭也。久し振りに腹が満足したようだ。帰寮して直ちに昼食をとる。昼食後、高山君とジャガ芋を買いに行ったが入手できなかった。」

3月30日（金）2部「夜食をとる。ペコペコで少しも元気が出ない。近頃非常に腹がへる。あああと2倍食わせてくれれば。」

3月31日（土）2部。「今朝寝たのが2時半過ぎ。起きたのが10時頃。少しも元気が出ない。」

腹がへって仕様がな、朝食はうまかったが量が少ない。オカズは鯉の煮付けだった。」

4月1日(日)1部、「朝食はサツマ揚げでうまかった。夕食はパン、バター、ジャガ芋、カキ、ルタの汁。皆ぶつぶつ言う。」

4月2日(月)1部、「朝食。若布の汁は非常にうまかった。御飯も暖かくてよかった。昼食を2回食べた。山方工場の昼食のオカズは大根の煮付と漬物2きれ。寮の昼食にくらべて悪い。夕食はルタとイルカの肉で割合うまかった。」

4月9日(月)2部突撃、「寮の夕食のオカズは魚の塩漬で非常にうまかった。工場の夜食のオカズも魚の塩漬で非常にうまかった。」

4月12日(木)2部突撃、「中村君持参の鹿児島土産をもらう。ユデ卵・ミカン・握飯・大豆などうまし。芝君が知合いの富貴村の村長さん宅からもらってきたサツマ芋、カキモチうまし。」

4月13日(金)2部突撃、「鹿児島県知事 柴山博氏からわれわれにプレゼントあり。各自に蘇鉄飴10ヶ、メザシ7匹なり。うまし。」

4月14日(土)2部突撃、「朝食のオカズは雑魚で非常にうまかった。夕食のオカズも雑魚でうまかった。リンゴまでついた。野菜のゴマ油揚げ。牛乳を飲む。」

4月15日(日)1部突撃、「朝食のオカズは雑魚でうまし。夕食のオカズのイルカの肉はそれほどうまくなし。」イルカの肉の鮮度が落ちたのだろう。

4月16日(月)2部突撃、「朝食のオカズはハナフとサツマ揚げ。うまし。」

4月17日(火)2部突撃、「昼食。御飯の上にサツマ揚げと菜っ葉。うまし。」

4月18日(水)2部突撃、「朝食。バターでいためた菜っ葉。イルカの肉はまずし。夕食の小あじ2匹うまし。夜食の貝うまし。」

4月19日(木)2部突撃、「夕食を2杯食べる。久し振りの満腹感。」

4月20日(金)2部突撃、「夕食のオカズはカキ。うまし。夜食のオカズはルタ。」

4月24日(火)2部、「夜食を2回とる。」

4月26日(木)2部、「夜食のオカズはモズクと雑魚。うまし。」

4月27日(金)2部、「ボンタンが5ヶづつ配給される。朝食のオカズはモズクと雑魚。うまし。」

4月28日(土)2部、「朝食の雑魚うまし。蒙古の徳王贈の蒙古牛うまし。」

4月30日(月)1部、「高山君に送ってきたユデ卵、大豆、酒饅頭をもらう。」

5月1日(火)1部、「朝食を寮と工場とで都合2回食べる。パンなり。」

5月4日(金)1部、「リンゴ3ヶと味付海苔配給さる。1円30銭なり。」

5月10日(木)2部、「高山君に送ってきたアクマキ(チマキ)をもらう。」

5月中旬以降食事が悪くなる。ことに5月15日(火)から5月23日(水)までの9日間は、

米43%、大豆・大豆粕・パン57%の雑炊となる。しかしこの雑炊には不満の声が強く、生産能率が低下したため、5月24日(木)に中止となる。私の5月22日(火)の動員日記はまさに怒り心頭に発したものである。

5月15日(火)1部。「昼食は雑炊。夕食のオカズはルタ。」

5月19日(土)公休。「寮の雑炊は箸が倒れる。山方工場の雑炊は箸が倒れない。工場の雑炊の方が濃くて良い。夕食のオカズはフキと玉ネギ。」

5月21日(月)2部。「夜食も雑炊なり。一体3食のうち2食を雑炊にするとは何事だ。これでいいと思っているのか。」

5月22日(火)2部。「9号室一同で半田の街に出る。先づ天プラ屋にて天プラを食う。油物はうまかった。3円也。次に大衆食堂に行く。2杯オカズを食う。1円也。腹具合おかしくなる。」
「それにしても今日の朝食は雑炊2杯。夕食はパンとスープ。夜食は雑炊1杯。なんと貧弱なことだろう。これで一体生産能率100%を上げることが出来ると思っているのか。今晚も働かず。電気ドリルひとつ握らず。鋏ひとつ打たず。」

「飯を食わせろ!!雑炊で元気が出るもんか。3食のうち1回も飯が出ないとは。わざわざこんなところに引張って来ておいて。」
「農園に行っている田中君の話では、3食とも飯で、牛乳も少しあるそう。」

5月23日(水)2部。「朝食は雑炊なるも、夕食・夜食は飯なり。夜食の時間は0時50分~1時30分なり。」

5月24日(木)2部。「朝食も夕食も飯だった。仕事がないので、22時頃、工場の畳部屋で布団をかぶって眠る。そして(5月25日)午前3時過ぎに眼を醒ます。しまった!!夜食を食べそこなった。しかし、なんと高江君、中村君、松崎君らみんな居るではないか。実は、23時頃警戒警報が出たので、夜食を食べられない。じーっと待っていたら、警戒警報がたった今(午前3時頃)解除になったので、今から夜食を食べて、寮に帰るといふ。小生もみんなに合流して夜食をとる。飯なり。」

5月30日(水)1部。「昼食はパンなり。」

6月1日(金)1部。「毎食180グラム(1.2合)だったのが、今日から朝食120グラム(0.8合)、昼食140グラム(0.9合強)、夕食130グラム(0.9合弱)となる。3割減である。」

6月3日(日)2部。「朝食の汁うまし。夜食は米と大豆なり。」

6月5日(火)公休。「もし七高が7月に始まらなければ、われわれは何時まで、こんな嫌な所に居なければならぬのか。考えただけでもぞっとする。」

6月6日(水)2部。「各自に、海苔(1等)2袋づつ配給になる。1円70銭也。高江君・土井君・前野君の3人は昨日伊勢神宮に参拝したが、予め外泊しますと断っていなかった。そのため本日は食券を支給されず。いかに無断外泊が悪かったといっても、散々皮肉を言われて食券まで

没収されるとは、3人はぶつぶつ言っていた。高江君は頭痛がすると言って21時頃帰寮する。23時30分頃入江先生が山方工場に来られる。入江先生が食堂と交渉され、土井君・前野君の2人は、食券なしで夜食を食べられることとなった。しかも入江先生は御自身の分を、2人で分けて食べなさいと言って、食堂を出て行かれたそうだ。入江先生は本当に良い先生だ。」

当時、食券なしでは食事ができなかった。当時の苗代寮の生活、苗代寮、食券などのスケッチが、私の3月19日の動員日記に残っている。これを図3に示す。

6月7日(木)2部。「リング4ヶ半づつ配給になる。」

6月8日(金)2部。「夕食のオカズは魚の佃煮なり。」

6月11日(月)1部。「山方工場では昼食の量多し。」

6月13日(水)1部。「夕食は米に混じる大豆の量が減って良し。オカズは大きい豆腐なり。うまし。」

6月14日(木)1部。「夕食のオカズは雑魚なり。うまし。」

6月15日(金)1部。「山方工場では寮にくらべて量多し。先生方も御存知のようで、山方工場にて昼食、食券のあまりを名工専の人達にもらう。」

6月16日(土)1部。「昼食は飯とジャガ芋だった。うまし。」

6月17日(日)2部。「この3日間満州国からの外米なり。うまし。夜食の時間となる。夜食は山方工場では食べられないので、本工場の食堂に行く。ところが運悪く警戒警報が出たので、消灯となり、食事中止となる。深夜の警戒警報なので、田中君・前野君・小生の3人はあきらめて寮に帰る。高江君は1時間待ったが、警戒警報解除になりそうもないので、あきらめて寮に帰る。残りの3人(高山君・土井君・松崎君)は3時間待って(6月18日)午前3時30分頃警戒警報解除となり、夜食を2杯づつ食べて、4時30分頃寮に帰りついた由。」すざましいまでの食

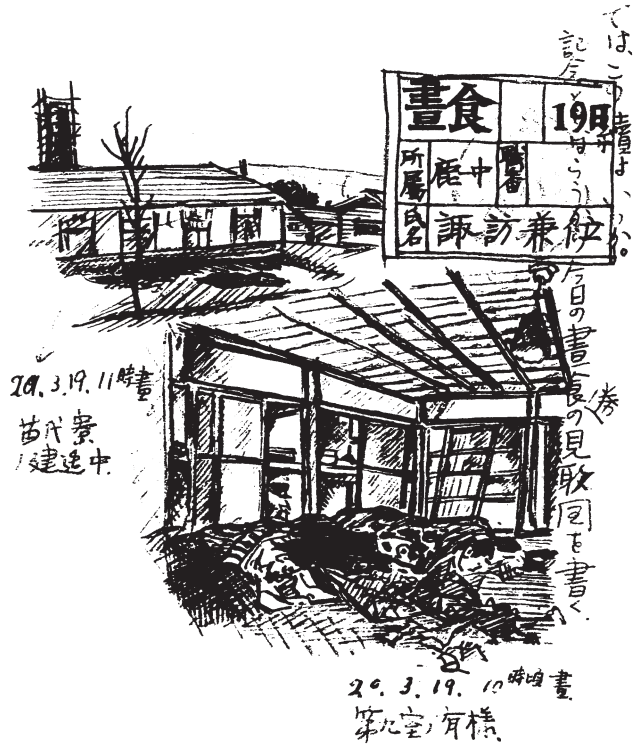


図3 苗代寮第5中隊第9室 1945年3月19日(月)午前10時頃のスケッチ。この日は公休であり、布団にはいったまま読書している生徒たち。右上は食券のスケッチ。左上は増築中の苗代寮のスケッチ。いずれも諏訪画。

への執念である。

B. 病 気

勤務条件はきびしいのに、食生活もひどかったから、軽重を問わず、みんな病気にかかっているといっても過言ではない。動員生活が3ヶ月を過ぎる頃から、同室（第9室）の友人達がつぎつぎに調子を崩していった。

5月15日（火）1部。「安楽君と筒井君が半田病院に診察を受けに行った。安楽君は脚気と言われ、筒井君は病名はわからないが、血沈検査をうけた。3日間休養した方がよいと言われたが、筒井君はやはり出勤すると言っている。今日は我々第3小隊だけでも欠勤が10名もいる。多い。」

5月17日（木）1部。「筒井君は半田病院に行った。病名はまだ不明。血沈は45mm。熱は39℃位。」

5月18日（金）1部。「筒井君が遂に欠勤する。」

5月20日（日）2部。「筒井君と中村君が半田病院へ行った。筒井君はレントゲン検査をうけ、中村君は血沈検査をうけた。」

5月22日（火）2部。「田中君が農園勤務となった。筒井君は半田病院でのレントゲン検査の結果が判明し、肺門浸潤で、2ヶ月間の帰郷静養を要するとの証明書をもたらしてきた。また石橋君も肺浸潤で3週間の静養を要するとのこと。」

私は5月22日に半田の町で天ブラを食べたために、下痢症状をおこし、これが6月8日までつづいた。

5月23日（水）2部。「石橋君が農園勤務となるらしい。」

5月28日（月）1部。「筒井君が明日帰鹿することとなった。田中君は農園勤務になってから、非常に色が黒くなって、とてもいい顔色をしている。」

5月30日（水）1部。「今日はほとんどの者が、病気やサボりで欠勤す。われわれ第9室は、在籍12名のうち、公休1名。日直1名。病気帰省中1名。農園勤務1名。欠勤5名。出席は3名（高江君・松崎君・小生）だけである。」

6月1日（金）1部。「今、下痢患者が非常に多い。現在4年生で、欠席20名のうち、15名位がひどい下痢で休んでいる。大抵の者は軽い下痢をやっているようだ。自分もその1人だ。その原因は生水にあるようだ。しかし、大抵の者が生水を飲んでいる。いま伝染病発生のおそれが大分ある。すでに岡田工場に1名チフス患者が発生し、この苗代寮第2中隊（城東商業）に1名、チフスの疑いの濃い者がでたようだ。土井君も下痢の質が悪くて、第9中隊の第9室に隔離された。注意しなくてはならない。」

6月3日(日)2部。「土井君が第9中隊より解放されて帰寮する。」

6月6日(水)2部。「松崎君が下痢患者として第13室に行くこととなった。」

C. シラミの発生

仕事・食生活・病気に加えて、シラミが大量に発生したのはショックであった。痩せ細った体から、血を吸いとってゆくシラミには大変悩まされた。

3月28日(水)2部。「シラミがいるのには困る。自分にも相当な数のシラミがついている。シラミに喰われた跡が無惨にもみえる。今更如何せん。今日は裸になってシラミを澤山(10匹ぐらい)取ったが、寝た後も非常に痒かった。」

6月4日(月)2部。「今日各室にひとつづつ、蚊帳が配られた。今晚から蚊の来襲も受けずのんびりと寝られることだろう。」

6月11日(月)1部。「昨夜ほど蚤に悩まされた夜はなかった。近頃シラミはいなくなったようだが、蚤と蚊が多くなった。最近真裸で寝ることにしている。シラミに悩まされることがないからよい。」

6月17日(日)2部。「撃滅」という害虫駆除薬が配布される。」

D. 泥棒

貧すれば鈍する。動員学徒の間で盗難が発生した。動員学徒が泥棒になったのである。はじめは、他校の生徒の仕業だろうと思いながら警戒した。しかし、動員生活が2ヶ月を過ぎた頃、自分達の中学校の同級生が泥棒になり下ってしまった。一流中学だと自負していた私のショックは大きかった。

3月24日(土)1部。「夜入浴する。入浴しながらも洋服を盗られはしないかと心配である。また警報が出て真暗になったらと心配でたまらない。洋服については、川田君が見張ってくれるので、非常にありがたい。先日は、入浴していた川内中学の生徒が、7名も丸裸にされたそうだ。」

4月16日(月)2部突撃。「工場で夜食を食べて帰寮したのは真夜中の1時頃だった。張ってなかった暗幕が張ってあり、はずしたはずの電球がちゃんとついている。筒井君のビター入りの罐が開けられて、畳の上に散らかっている。また、内側から打込んでおいた釘が抜かれ、戸がこじあけられている。われわれが工場で働いている留守に、夜襲されたとわかったが、夜中だし疲れているので、そのまま就寝する。」

4月17日(火)2部突撃。「朝起きてみて大騒動だ。夜襲されている。中村君のトランクにみんなのエッセンをに入れて鍵をかけ天井裏にかくしておいたのに、鍵がこじあけられ、トランクの中味は盗まれ、一物も残ってなかった。そのほか、各自のトランクも被害にあった。6人(安楽

君・芝君・田中君・筒井君・中村君・前野君)が被害にあい、わずかに3人(高山君・松崎君・小生)だけが被害にあわなかった。石原先生に被害の詳細を報告した。石原先生は各室を調査されたが、盗まれたものは出てこなかった。実は昨日(16日)お昼頃、天井がミシッ・ミシッと音をたてたので、すぐわれわれは天井裏をみた。Tが天井裏を這っているのだった。われわれに目撃され、Tはめんくらっていた。彼に嫌疑をかけることもできる。こんなことがあったので、われわれは電球をはずし、釘を内側から打ちつけて工場に出掛けたのであった。「仕事を終えて夜中に帰寮する。どうも今日(17日)も夜襲されたいらしい。」

4月18日(水)2部突撃。「起きてみると、たしかに夜襲されていた。被害はそう大きくなかった。日直の著野君の目撃談によれば、第7室と第10室の者が犯人らしい。われわれは電球をはずしておいたが、それには構わず、めぼしいトランクを自分達の部屋に運び込み、中味を盗みとったあと、われわれの第9室に戻したそうだ。」

E. いじめ

「いじめ」ともいうべきものが、動員生活のつづくなかで顕在化してきた。泥棒と同じく心までがすさんでくるのであった。

4月14日(土)2部突撃。「朝食後、松崎君が第7室のMに呼び出され、理由もなしに打たれて、泣いて戻ってきた。顔がはれていた。以前にも、安楽君が同様な事をされた。いやしくも同級生を腕力に訴えて(同僚の威力を借りて)なぐるとは、なんたる下品な卑怯な行為であろうか。」

5月12日(土)2部。「芝君がNに引張られてなぐられた。どうも彼奴等はいけない。」

5月27日(日)1部。「小園君が鹿児島から戻ってきた。びっくりする。お土産の握飯やサツマ芋をほぼぼる。うまい。その土産をSがゆすりにきた。卑しい奴だ。」

5月30日(水)1部。「一昨日、田中君がSに打たれた。小園君もSにすごまれた。」

5. 空襲

2月10日われわれが鹿児島から半田へ向う途中、名古屋駅から名古屋城が遠望された。半田に着いて間もなく、名古屋空襲が本格的にはじまった。名古屋空襲で焼け出された家々の灰は、半田まで飛んできた。何度、爆撃を終えたB29の大編隊をみて、歯ぎしりしたことだろう。7月の中旬・下旬になると、半田市が米軍の爆撃の目標となった。中島飛行機半田製作所は破壊された。

3月19日(月)公休。「夜ズドン ドスン ドスンという凄い音がきこえてくる。もともと自分は夜中に目を覚ますことなど滅多にない。余程の事でもない限り。しばらくすると、木牟礼先生の声や丙組の者の声がきこえてくる。「あ B29 が探照灯につかまった」という声や、ひっきりなしに続くドスン ドスンという音がきこえてくる。それもまた次第に遠ざかって遠い夢路を辿っ

てゆく。突然 日直の田中君の「起床、／」の聲に目が覚めて、やれやれと思いつつも床もたたまわずに起きて、点呼の位置に出た。その瞬間驚いた。名古屋方面から灰が飛んでくる。紙を焼いた時のような灰である。今朝の空襲で焼け出された、名古屋市民の家々の灰であろう。名古屋の空襲のひどかったことが想像される。3月12日の空襲もひどかったようだが、それに優るとも劣らないものであった。産報時言にも「見よ中京の惨状を救え、我等の工友を」と書いてあった。4万戸が焼け出されたらしい。それにしても、何と不気味な空模様であったことだろう。下は青白く、その上は黒くなっている。不気味、／不気味、／」

3月25日(日)2部。「夜中にドカン ドカン ズドン ズドンという音が耳元でうなり、部屋がガタガタと地震のようにゆれるので、遠い夢路を辿っていた自分は目が覚めた。どうもこの衝撃からすると余程この近くらしい。突然木牟礼先生の『退避、／退避、／』の聲がきこえてきた。起きて身支度を整え、退避壕近くに出て空を眺めていると、探照灯に、B29 がくっきりと浮び出された。名古屋の上空に向かって進んでいる。高射砲弾は、B29 の周辺に炸裂するだけだ。歯痒くてたまらない。寒いので、洋服の上からオーバーをかけ、その上から、どてらをかけた。しかしやはり膝から下が寒いので、また部屋にもどって寝た。しばらくして音がだんだん遠ざかって聞えなくなった。」

4月7日(土)1部突撃。「午前9時30分頃、空襲警報がでた。眞昼間に珍らしい事だと思っていると、半田中の生徒達が「待避だ、待避だ、／」と言って皆出て行った。安田組長も総員待避と言う。名工専2人と一中生5人、われわれ7人は、電車停留所付近の丘に待避して雑談した。待避とは名のみで、山遊び・散歩である。お昼頃、名古屋方面より脱退中の敵 B29 編隊へ、わが帝国の戦闘機の体当たり攻撃。あつという間に、猛烈に大きい炎が横へひろがり、B29 は機首を下げ、黒煙をはきながら、真逆様に墜落していった。みな思わず万歳、／と叫び、拍手した。はじめてみる B29 撃墜の瞬間だった。」

5月14日(月)1部。「今日は空襲警報があり、名古屋方面へ B29 が続々爆撃に行くのをみた。名古屋の方向に、爆煙が高くあがるのがよくみえた。400 機来襲した由。」

5月17日(木)1部。「安らかな眠りについてる夜半、突然、河野先生の『退避、／退避、／近くだぞ』震えるのを我慢したような大きな声。爆撃の破裂音と照明弾の照らす薄気味悪い明るさと、B29 独特の爆音とがまざりあって、眠りから覚めた。しかしすぐには退避する気にはなれず、寝ていたが、皆が庭へ降り立ったので、自分も降り立つ。名古屋へ侵入する憎々しげな B29 が、探照灯に照らし出されながら、悠然と飛んでいるのをみると、歯痒くてならない。しかし突然わが高射砲の弾幕に取り囲まれ、真紅な火連となって真逆様になって落ちてゆくのをみた。思わず快なる哉を叫ぶ。5機そんなのをみた。」

5月17日の中部日本新聞に、4月7日のB29撃墜の詳細が宮岸特派員によって次のように報道された。

「4月7日白昼中京来襲の敵B29編隊を同上空に激撃、敵編隊長機に必中の体当りを喰わせて撃墜壮烈な戦死をとげた辻本薫少尉（三重県飯南郡伊勢寺村大字野村140出身）および同乗者加藤政之伍長（北海道小樽市出身）の両荒鷲に誉の感状が授与され長くも上聞に達した旨発表された。必殺の闘魂を目の辺り戦う中京市民の眼前に展開された辻本機の体当り…名古屋市東方を東進する敵の10機編隊を僅か下方に発見し…狙ひは右内側の発動機、沈着に最大の効果を狙って辻本機は、じりじりと左3機中の編隊長機に肉薄、真正面からおっかぶせるように猛然と激突したのだった。ときに午前11時49分、真っ二つに裂けた敵の巨体は一瞬翼も胴体もばらばらに…」と。

5月22日（火）2部。「半田駅の近くの本屋で週刊朝日5月20日号を求む。20銭なり。表紙をみておどろく。4月7日われわれが目撃したB29撃墜の絵なり。三輪晃勢画伯筆。」

6月9日（土）2部。「起床前8時30分頃、空襲警報が出た。B29が1機浜松上空を旋回中との情報があったのみで、大した事はないと寝ていたら、9時頃だったか、急にドカンときて、ガタガタと揺れた。はじめは地震かとも思ったが、下は揺れないので爆撃だとわかった。こんなに衝撃を強く感じたのははじめてだった。すぐ白山に待避する。名古屋方面はまるで桜島の火山灰の様な色をした煙が横にたなびいていた。東方を敵機が10機悠々と南に向かって飛んでいるのを見た。しばらくして空襲警報が解除されたので帰寮する。」

図4は、3月30日の動員日記にあるB29である。

7月15日（日）艦載機P51 9機が半田市を空襲した。いきなり襲ってくる飛行機のこわさをはじめて体験した。パイロットの顔を目撃した。武豊の日本軍の高射機関砲の応戦が印象に残っている。この日8人の市民が死亡した。

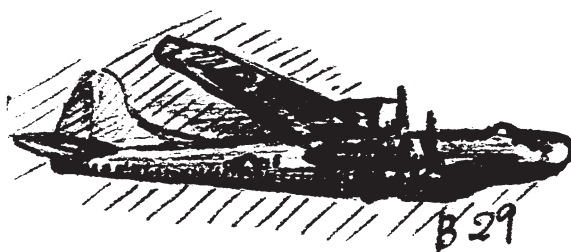


図4 B29（アメリカ戦略爆撃機）

1945年7月24日 B29 78機によって中島飛行機半田製作所は猛爆撃を受け破壊されつくした。

1945年3月20日の動員日記（諏訪）より。

7月24日（火）10時38分。
B29 78機による猛爆撃と100

機以上の艦載機による機銃掃射が約20分間続いた。私は爆撃の直前、工場にはいった。空襲警報がでているから、直ちに退避するように言われたので、工場正門を出てすぐ北西方の溝のなか

に私は退避した。間もなく猛爆撃がはじまった。1トン爆弾や250キロ爆弾が空気を裂きながら落下する不気味な音を何回もきいた。生きた心地もなかった。米軍資料によると、1トン爆弾7発と250キロ爆弾2,149発が投下された。野呂春文氏は約2,300の爆弾跡を確認している。このうち中島飛行機半田製作所には約1,600の爆弾跡が確認されている（野呂，2000）。爆撃直後私は本工場にはいり、工場が破壊しつくされたのを目撃した。この日の爆撃によって264名以上が死亡した。

爆撃直後の7月25日（水）か26日（木）に、私は高山君と一緒に苗代寮北東七本木池わきの工員住宅と独身寮などの爆撃跡を見学に行った。バラックの住宅は破壊しつくされていた。そのなかに、かすり傷ひとつない赤ん坊が1人ぼつんと死んでいた。

6. 戦況

3月17日夜 硫黄島守備隊（栗林忠道最高指揮官）は玉砕した。3月21日正午大本営発表があった。3月21日（水）夜の点呼の時、石原先生からお話を聞き、われわれ一同黙祷を捧げた。新聞にも詳細に報じられた。3月22日（木）の私の動員日記には、新聞記事が丹念に筆写されている。

3月26日には、慶良間列島の渡嘉敷島・阿嘉島・座間味島に米軍が上陸し、さらに3月31日には神山島・前島などに上陸し、遂に4月1日沖繩本島に米軍が上陸した。4月2日の新聞には「琉球決戦」と題する高村光太郎の詩が載っていた。

琉球決戦 高村光太郎

神聖オモロ草子の国 琉球

つひに大東亜戦最大の決戦場となる。

敵は獅子の一撃を期して総力を集め

この珠玉の島うるはしの山原谷茶、

万座毛マンザコウの緑野、梯梧テイゴの花の紅に

あらゆる暴力を傾け注がんとする。

琉球や まことに日本の頸動脈

万事ここにかかり万端ここに経絡す。

琉球を守れ、琉球に於て勝て。

全日本の日本人よ、

琉球のために全力をあげよ、

敵すでに犠牲を惜しまず。

これ吾が神機の到来なり。

全日本の全日本人よ、

起って琉球に血液を送れ。

ああ恩納^{オンナ}ナビの末孫熱血の同胞等よ、
薄葵^{フクアオイ}の葉かげに身を伏して、
彈雨を凌ぎ兵火を抑へ、
猛然出でて賊敵を誅戮し盡せよ。

そして4月19日の新聞には「沖繩決戦」と題する三好達治の詩が載っていた。因みにこの詩は、三好達治全集には載っていないようである。

沖繩決戦 三好達治

獅子は寂寥たり
獅子はその沈黙して搏たざる時に於て寂寥たり
猛鷲も亦沈黙して
その搏たざる時に於て寂寥たり
勇士の心魂
またまさにそれかくの如きを知る
嗚呼そは沈黙して
如何に久しく寂寥に耐へたるかな
然れども強弩は眩を発し
長堤は既に決したり
暴漲地軸を揺がしなり
碧落一時に彼等が頭上に碎け墜つ
沖繩周邊青海波山なすところ
神州百鍊の勇士
今日精鋭をこぞりすぐりて
鯨鯢をここに引裂き屠り
日夜に海神に供しまつるは
戦機二なし
げに国運を此一挙に賭するなれこそ
その名よし沖繩決戦
神機日に動き兆し
回天の偉業歩一步著す
陽春桜花の天
うららかに微風わたり
凜烈として一億の肺腑に徹す
その名よし げに沖繩決戦。／

高村光太郎・三好達治のふたりの詩人のこれらの詩は、16歳の私の心をゆさぶるものがあった。

特攻隊による絶望的な攻撃が繰返され、新聞にも度々報じられた。4月7日には、戦艦大和が徳ノ島沖で撃沈された。しかしこのことは一切報道されなかった。しかし風の便りで、5月か6月には大和沈没をわれわれは知った。

4月14日（土）の動員日記には、アメリカ大統領ルーズベルトの急死（4月13日）のことで、米英軍がベルリンに迫ったことが書かれている。4月25日（水）の動員日記には、赤軍のベルリン突入が書かれ、5月1日（火）の動員日記には、ムッソリーニの処刑が書かれている。5月4日（金）のそれには、ベルリンの陥落とヒトラーの自殺が書かれ、5月9日（水）のそれには、ドイツの無条件降伏（5月7日）が書かれている。5月29日（火）のそれには、神雷特別攻撃隊員332人に感状が授与されたこと、5月31日（木）のそれには、神風特別攻撃隊員453人に感状が授与されたことが書かれている。6月10日（日）の動員日記には、6月9日の帝国議会での阿南陸相と米内海相の演説の内容が書かれている。沖縄の戦況について、制空権を把握するに至っていないこと、地上戦闘は逐次圧迫せられつつあり、戦線整理の止むなきに至っていることなどが明記してある。6月23日には、沖縄で牛嶋満司令官と長勇参謀長が割腹自決した。沖縄での日本軍の組織的な抵抗はなくなった。

本土決戦の日が刻々と近づくのを、われわれは全身でうけとめていた。「死」ということは、多かれ少なかれわれわれの生活のなかで、意識の中に定着しはじめていた。日本は決して負けないだろう。しかしその前に、自分は死ぬかもしれない。自分の生きているうちには、「平和」など訪れてこないのではないか。そういった、あるやりきれない気持ちをまぎらすために、非番の晴れた日には、私は苗代寮から南の方の明治天皇御野立所にぶらりと出掛けて、のどかな丘陵地帯を歩きながら、「丘を越えて行こうよ 真澄の空は朗らかに…」の歌を大声でどなったりした（諏訪、1975）。

7. 動員生活（その2）

A. 安田昇組長

われわれは山方工場の安田組で仕事をしていた。工員6名の長が安田昇氏であり、また学徒を含めると、安田組は50～70名の人員であった。中肉中背やや小柄の人であった。

3月25日（日）2部。「今夜は非常に冷えて少しも仕事をする気にならない。安楽君・高山君・芝君などはこっそりと、床の中にもぐり込む。小生も何度かもぐろうと思案したが、何しろ安田組長の眼がこわいので起きていた。意外なことに、安田組長曰く『今日は冷えるな。もう仕事はないのか。では今日だけの事にして、皆んな寝ることにしよう。』と。そこで皆床にもぐり込む。午後11時過ぎまでの2時間ばかりであった。今夜の夜勤は一中8名と京都三中2名の計10名。簡

井君は起きて読書。」仕事場の一角に畳が敷いてあり、フトンが積んであった。そこで休憩するのであった。

3月29日(木)2部。「鉄板2枚に穴を開けることとなった。1枚は簡単に穴を開けることができた。しかし、他の1枚はなかなか穴が開かない。松崎君と2人で苦闘していると、安田組長が『どうして穴が開かないのか?』と言われたので、『この鉄が馬鹿に堅いのです』と答えたら、『いや錐が悪いのだろう』と言って錐を見ておられた。そして3本の錐(Hope 6mm2本, 4mmC・S 1本)を、グラインダーで研ぎ、それを電ドルにはめて、鉄板に穴を開けられた。安田組長は実に仕事がうまい。錐の研磨など、名工専の人達とは段違いに上手である。」

4月17日(火)2部突撃。「ああ低周波の電ドル無きをば如何にせん。高周波の電ドルで昨夜から、取付桁の鉄板に穴を開けているが、到底開かるものではない。すぐドリルが焼ける、切れなくなる。今夜はやっとひとつの鉄板に穴を開けたのみであった。」

4月18日(水)2部突撃。「今日は低周波の電ドルがあったが廻転がおそい。感電しそうだった。今日は安田さんから、高周波電ドルで鉄板に穴を開ける要領を教わった。それを活用して仕事をした。」

4月19日(木)2部突撃。「今夜はちっとも働かず。前野君が安田さんに頼んだ。交渉よろしきを得て、今夜は寝ることを許された。」

4月24日(火)2部。「今日は普通並みの仕事をなす。いま右組は左組に4台勝越している。われわれ安田組は他の組をリードしている。頼もしい。」安田組では右組と左組に分けて、競争させていたらしい。

5月8日(火)2部。「工場へ行って、安楽君・芝君・高山君らとこっそり脱け出して『勝利の日迄』を観に行く。工場に戻ったが電ドルが動かないので、皆なでトランプの七並べをする。」

5月10日(木)2部。「工場では今日は仕事はせず。小生は夜9時頃から寝た。安田組長は近頃、とくに機嫌が悪い。俺達が働かないからだろう。」

5月21日(月)2部。「今日は工場では少しも働かず。まず、高江君・高山君と小生の3人で、『名刀美女丸』を観に行く。工場に戻ってから安田さんと話をする。近頃は機嫌が良い。そのあと11時頃まで寝る。」

5月23日(水)2部。「今日は仕事をしなかった。安田組長もわれわれが近頃仕事をしないので、あきれ返っておられた。」

5月25日(金)2部。「工場では治具の取はずしをなす。4mm位 治具が狂っているようで、はずしたのである。そのため近頃、脚室を造らないそうである。」

6月4日(月)2部。「工場では、近頃、彩雲の合格率が悪く、その最大原因は、脚室にあるという事らしい。今日は、海軍航空本部の海軍技術大尉と監理官とが来て、現在造って置いてある脚室を検査したそうである。鋌でもちょっと傷があると、お釋迦にしたそうだ。そのなかで、ひどいのと、そうでないのとにわけた。」

実は、山方工場の安田組で仕事をはじめた2月・3月頃から安田組に送られてくる鉄板が、必

ずしも設計図どおりでないことに私は気付いた。わずかに違うのである。そのため穴を正確に開けられないこともあった。鋳型が十分に精確でなかったためではないだろうか。

B. 須川政太郎さん

級友の園田君の半田動員の思い出（1996）に、須川政太郎さんが登場する。

昭和 20 年のある日、日隈先生からの命で、当時、中島飛行機半田製作所の総務部厚生課勤務の須川さん（半田市東本町在住）のお宅に、防空壕を作るように指示された。ショベルなどを持って、落君・後藤君・園田君の 3 人がお宅を訪れ、2 日間で防空壕を作り上げた。須川さんご夫妻は大変喜ばれ、3 人は晩飯を 2 回ご馳走になった。白米のご飯に、味噌汁、魚介の缶詰など、美味しい晩飯だったらしい。

「その時は、須川さんが、『僕は音楽の教師で、鹿児島師範と二高女に勤務したことがある。君達、「北辰斜に」を知っているか。』とのこと。

3 人は旧制七高に合格していたし、「北辰斜に」の 1 番の歌詞とメロディは知っていたので、『知っています』と答えると、須川さん、ニッコリ笑って、「北辰斜に」の曲は僕が作曲したんだ、とのこと、思わず 3 人、目を見合せびっくりした次第、その時の須川政太郎先生の笑顔はいまだに忘れられない。」

須川さんは、明治 17 年（1884 年）和歌山県の新宮市に生まれ、東京音楽学校卒業後、鹿児島県師範学校および鹿児島一中の音楽教諭。このとき、大正 4 年の第 14 回記念祭歌『北辰斜に』を作曲された。30 歳の時であった。これは旧制七高で最も有名な記念祭歌であり、もっともひろく歌われている。その後、大正 7 年の第 17 回開校記念祭歌『夕陽直射す』を作曲し、同じく大正 7 年の第 17 周年記念祭歌『白露しげき』を作曲し、大正 14 年には対五高戦応援歌『碧落燃えて』と、同じく『魔神のすさび』を作曲された。大正 8 年以降、京都女子師範学校および桃山高女、彦根高女、滋賀女子師範および大津高女、半田高女の音楽教諭を歴任された。園田君達が会った昭和 20 年（1945 年）当時、須川さんは 60 歳だった。須川さんも旧制七高の新入生に半田市で会ってびっくりされたことであろう。当時、中島飛行機半田製作所では所歌（西條八十作詞）と突撃隊の歌（山田岩三郎 作詞）がよく歌われていた。須川さんは突撃隊の歌を作曲された。所歌は信時 潔氏が作曲した。須川さんと信時氏とは東京音楽学校の同級生であり親友であった。須川さんは戦後、半田市立高女・半田高校の音楽教諭をつとめられた。そして、昭和 30 年（1955 年）に 70 歳で他界された。墓は新宮市の南谷墓地にある。

C. 読書など

動員生活のなかで、まず日記に登場するのは、名工専航空科の西尾さんに借りた探偵小説や尾崎士郎の「人生劇場」を読んだことである。次に、同じく名工専航空科の久野さんに借りた啄木選集や級友の安楽君に借りた「平凡」を読んだことである。

啄木の「ココアのひと匙」には心を動かされたらしい。4月19日の動員日記に詩の全文を筆写している。啄木がこの詩を詠んだ背景など何も知らぬままに、4月の終りには、二葉亭四迷が余程気に入ったのか、「平凡」のなかの気に入ったところを、丹念に動員日記に筆写している。

4月25日（水）午後2時から、苗代寮で鹿児島一中の卒業式が行われた。昭和20年は戦時特例として、5年生と4年生とが同時に卒業した。学校の講堂以外のところで、父兄の列席もなしに行われた卒業式ははじめてのことであつたらう。私は四ヶ年皆勤と寒稽古皆勤とで表彰をうけた。私は身分上は4月1日から旧制七高理科の学生であつた。しかし、これも戦時特例で、従来の中学校の動員先で、ひきつづき中学生として動員の仕事をつづけることになった。7月29日に半田市を去るまで、実質上私は鹿児島一中の生徒であつた。

5月8日（火）には鹿児島一中と福井商業との間で野球の試合があり、一中が勝つた。4月には、高知商工とも試合して勝っている。ただし、選手は5年生だけであつた。室内ではへボ将棋が大流行で、動員日記にしばしば登場する。

5月にはいと、芹澤光治良の「春の記録」を読んでいる。随筆短篇集である。そのなかの2篇のリルケの詩を日記に筆写している。

世紀が革まる処に リルケ
世紀が革まるちょうどその所に私は生きている。
大きなページがめくられるために起る風が感じられる。

われらは忙しく リルケ
われらは忙しく急いで走る。
だが、時代の足取りを、
永へに恒常なものの中での
些細なこととして見爲せ。／

すべて慌しいことどもは
ちぎ過ぎ去って、消えるだろう。
永くとどまるものが初めて
われらを被ひ清めるものだ。
若者らよ、おお、勇気の全部を
投げ与えるな、速度の中へ、
飛行の試みの中へ。

萬象は齷齪しない生気に生きる。
暗さと明るさ
花と本。

リルケのこの2篇の詩は、私の心にずしりときた。

週刊朝日の5月20日号に加藤楸邨の「萬緑」と題する俳句が3句載っていた。しみじみとしたものである。

- 独逸降伏 ヒトラー戦死報
「萬緑や 一運命に かかはらず」

- 空襲下
「火の色の 風がうがうと 木の芽だつ」

- 述懐
「萬緑や この蒼天の下の死処」

動員先で、手紙や葉書を受取るのは嬉しい。5月28日（月）には4通受取って嬉しかったと書いてある。木牟礼先生からの葉書には、「夜勤めを 終へしころかや 降りまさる」という俳句が添えられていた。「和田君からの手紙は、相変らず、元気で面白く奇抜な手紙である。近頃では、和田君からの手紙は面白いので、部屋の友人達の間で引張り凧になっている。」と書いてある。あとの2通は父と姉からだった。これで2月以来合計67通となったなどと書いてある。

5月31日（木）は、山方工場で英通社の英字新聞を楽しく面白く読んだと書いてある。久し振りの英文であった。また、6月16日（土）には、山方工場で蛍雪時代の4月号を見付け、載っていた官立専門学校と高等師範学校の今年度の入試問題を、中村君と2人で解いた。「ああ学問が、勉強が恋しくなった。久し振りに考へる。大いによかった。」と書いてある。まさに知の飢えである。

7月には、半田の古本屋で求めた小泉八雲の「怪談」をむさぼるように読んだ記憶がある。また、名工専の一人がこっそり貸してくれた「賃労働と資本」は、大事にかくし持っていただけで一頁も読まず、またこっそりとその人に返却した。敗戦直前、動員学徒の間には、禁制の本が少しばかり所持されていた、ささやかな証である。

D. お伊勢詣り

5月5日(土)は久しぶりの公休であった。そのうえ5月6日(日)は2部勤務なので17時30分始業である。時間はある。われわれ第9室一同8名でお伊勢詣りをすることにした。

「中村君を除く、第9室の面々、安楽君、芝君、高山君、田中君、筒井君、土井君、松崎君、小生の8名は、早目に朝食を済ませ、各自食糧を持参して、7時40分に名鉄農学校前を発ち、9時頃熱田神宮前に着き、熱田神宮に参拝する。この頃警戒警報が発令される。熱田神宮前から栄町を経て名古屋駅まで市電を利用する。名古屋空襲の惨状を市電のなかから見る。10時20分近鉄名古屋駅を発ち宇治山田駅に13時過に着く。車内はガラガラ。料金は4円20銭。木曾川・長良川・揖斐川の大きいのに驚く。途中 中川で乗り換える。宇治山田の第1印象はすこぶるよい。人々がなごやかで上品であり、町もさっぱりした優美な町で、神都の感を強くした。宇治山田駅から内宮まで電車で行く。」

「大鳥居をくぐり、宇治橋を渡り、花園を見ながら、玉砂利の歩道を進む。参道の両側には老杉古木うっそうとして昼なお暗く幽深い森の気がみちみちしている。内宮参道の一の鳥居をくぐると五十鈴川の御手洗に出る。小生こんな見事な清流ははじめて見た。川底の岩や礫がよく見える。大きな鯉が何十匹も、すぐ眼の前を悠然と泳いでいる。手と顔を洗い、御正殿に向う。無念無想、ただ一心に、皇国の必勝と、自己の飛行機増産敢闘をお誓いし、御前を下った。

終って、御札・御守・暦を戴き、五十鈴川にて手と顔を洗い、その水をぐっと飲み、川底の小石をひとつづつ有難く戴く。内宮を辞し、内宮前の売店にて、絵葉書・しおり・集印帳を求め、直ちに外宮前まで電車に乗り、外宮を参拝す。」

「日帰りは覚束なくなったので二見ヶ浦に向う。二見ヶ浦では大田旅館という手頃な旅館があった。米を持ってきたから泊めてほしいと言ったところ、快く泊めてくれた。午後4時30分頃のことである。2階の50畳敷に通された。国防献金を求められたので、8人で10円出した。米は3升出した。茶など飲み、各自外出した。帰館してから夕食を美味しく食べ楽しく語り合った。夕食後 安楽君と共に夫婦岩を見に出掛けた。丁度 満潮になろうとする時で、波濤岩に砕け渦を巻きまじかった。帰館し、2階の部屋から太平洋の波濤を眺め、午後8時30分頃就寝す。」

5月6日(日)2部。「6時起床。8人揃って夫婦岩を見に行く。朝食をとり、お昼の握飯をもらって旅館を辞す。宿泊料は1人7円20銭。それにサービス料1人90銭。二見ヶ浦で絵葉書・箸・へら・貝舟・根付・七福神貝・貝タヌキなどを求む。二見ヶ浦駅より内宮前へ向う。内宮を再び参拝す。五十鈴川にて小石を四つ戴く。父・母・姉・兄にひとつづつ。老杉古木のひとつの幹の周りを測ったら5mあった。内宮前で三体ダルマとシオリを求む。10時40分頃宇治山田駅を発ち、中川駅で乗換え、午後2時頃名古屋に着く。午後2時17分名古屋駅を発ち、金山まで行き、次に熱田行に乗換え熱田駅に着く。午後2時54分発の河和線に乗り、午後4時頃農学校前に着く。山越えて苗代寮に着く。級友と共に工場に行くも仕事なし。皆早退す。帰寮してから五十鈴川の水と若干の土産を石原先生にプレゼントす。喜ばれた。

今回のお伊勢詣りは、芝君(昔 名古屋に在住)の道案内によってスムーズに運んだ。日本人

としてのつとめを果たした気持である。」

大変良い旅であった。終戦直前でも、宇治山田駅や内宮前や外宮前や二見ヶ浦などで、いろいろな土産を売っていたことがわかる。

8. 半田から鹿児島へ

7月24日（火）のB29による半田空襲によって、中島飛行機半田製作所は、ほとんど壊滅した。

「旧制七高1年生は8月10日に長崎に集合せよ」とのことで、私は高山雷君と一緒に、7月29日（日）の朝、半田を発ち鹿児島に向かった。まず、猛爆のため廃墟同然となった名古屋の有様に、がくぜんとした。2月のはじめに見た名古屋の町には、黒い屋根瓦がつづき、お城の金の鯨も遠望されていたのに、大阪や神戸も名古屋と同じようであった。これらの大都市が完全に破壊されているのを見て、たいへん衝撃をうけた。

翌7月30日（月）の朝、汽車は広島駅に着いた。名古屋とは対照的に黒い屋根瓦がつづき、町並みが立派に遠望された。この広島の街が、1週間あとにあのように原爆のために、悲惨なことになることなど想像もできなかった。九州にはいり、そして鹿児島県にはいった7月30日の夜、汽車は市来駅で動かなくなった。何でも鹿児島駅が物凄い爆撃のために破壊されつくしたためだということだった。高山君と2人、駅のあたりでごろ寝しようと思っていたところ、あわれな一中生2人をみとめた一婦人は、われわれを駅前の旅館に泊めて下さった。婦人の御息が一中を出た海軍の将校とのことであった。

7月31日（火）のま昼に、西鹿児島駅に辿りついた。焦土と化した鹿児島を6ヶ月振りにみて、たいへん衝撃をうけた。

6月17日（日）の鹿児島空襲で、東千石町の実家は全焼し、両親と県庁づとめの姉は、常盤町の親戚宅（樺山家）に疎開していた。兄は呉海軍工廠で動員学徒として働いていた。母は6ヶ月振りに息子をみた。私のあまりの痩せ細り方におどろいた母は、てっきり肺結核にかかったのでは？ と心配したらしい。早速、翌日、宮崎県最南端の京町の吉田温泉に連れて行った。毎日のんびりと温泉につかり、8月10日（金）も近づいたので帰鹿した。8月9日（木）夕方原良町の旧制七高坂元教授宅に伺った。長崎から電報がとどいたばかりのところだった。長崎も広島と同様、特殊爆弾（原爆のことを当時こう呼んだ）のため破壊され、旧制七高2年生は多数病院にかつぎ込まれたとのことであった。こうして、1年生の長崎行きは無期延期になった。

8月15日（水）の放送は、常盤町の親戚宅（湯地家）で聴いた。雑音でほとんど聴きとれなかったが、大人達が敗戦を教えてくれた。まだまだ戦おうと思っていた時なので、悔しくて涙が出てきた。

V. あとがき

小学校1年の時に2.26事件(1936年)がおこり、小学校3年の時に日中戦争(1937年)がおこった。中学校1年の時に太平洋戦争(1941年)がおこった。中学校4年を昭和20年(1945年)3月に卒業し、4月から身分上は旧制七高の1年生になったが、実質上は中学生として動員の仕事に従事した。8月に終戦となったものの、旧制七高の授業が開始されたのは、昭和20年の11月下旬であった。私の小学校時代と中学校時代はどっぴりと第2次世界大戦につかっていたことになる。私は本文で、私の小学校・中学校生活を述べた。とくに昭和20年2月はじめから7月おわりまでの半田での学徒動員については具体的に詳しく述べた。

加藤周一氏は2000年の11月末に「私にとっての20世紀」と題する著書を公刊した(加藤, 2000)。これは2000年3月のNHKテレビ放映の内容を単行本として公刊したものである。この本のなかで、加藤氏は次のように述べている。「それぞれの地域の歴史が違い文化が違う以上、ナショナリズムの感情というのはなくなならないと思うのです。…ですから、戦争にならない、悲劇的な形にならないように、それぞれの歴史的文化的アイデンティティを失わないで、ナショナリズムを大きな国際的組織の中へ組み込んでいくことが必要になるわけです。20世紀はそれに失敗した。だから戦争が起った。…問題は、ナショナリズムと、広い視野からの国際的な協力関係を作り上げていく動きとは、どういうふうに融和できるかということです。それはおそらく21世紀の課題になるでしょう。」(p.192)。そしてまた加藤氏は次のように述べている。「戦争をかつて生み出したような考え方、あるいは文化が今日持続していれば、その持続か断絶かということは戦争世代に責任があります。…戦後の人も、戦争を生み出した、あるいは戦争犯罪の背景にある文化は持続している、そしてその中で育っているわけですから、その文化に対してどういう態度を取るのかについては、もちろん責任があります。…だから戦争を生み出した文化を承認すれば、それは間接に戦争に対しての責任があるということで、将来の可能な戦争に対しての責任があるということになります。要するに過去に対して責任はないけれども、未来に対して責任がある。」(p.47)。

そして加藤氏は、日本人の大勢順応主義をきびしく批判している。

加藤氏は2000年3月にNHKテレビで「戦争を語ることは、単に過去を語ることではない。現在を語ることであり、未来を語ることである。」という趣旨のことを話されたが、その内容は以上のように、この加藤氏の著書に明記されている。

私は折りにふれて朝日歌壇に拙歌を投稿している。次の12首は大戦を回想した拙歌である。

- ・時局をば語らず英語を淡々と 教えし師のあり昭和17年
- ・特攻の基地とはしらず基地づくりし 19年秋知覧訪い得ず

- ・軍用機つくり疲れて痩せし身に 虱ふとりし動員の日々
- ・偵察機「彩雲」この手で作ったり 特攻機として消えし悲しみ
- ・軍用機作りし学徒たりし地に 半世紀経て新学部創る
- ・戦時下の学徒動員日記出づ 克明なればおどろきて読む
- ・広島の家並みの屋根の眼にのこる 車窓より見し原爆直前
- ・戦死せし友の顔々思うては 学究めきしと述ぶる君去る
- ・戦友あまた送られもせず野に逝けり送るなかれとて大正人逝く
- ・重く深く戦争放棄誓いしを 反故にするのか半世紀を経ず
- ・バイブルに「平和を作る人たち」の語 ただひとつあり作るべき平和
- ・平和作る人びとこそは幸なりと 聖書は説きぬ「作る人びと」

私の動員先であった半田市においては、昭和56年（1981年）に、佐藤明夫氏（元 半田高校教諭）を中心に、「半田空襲と戦争を記録する会」が発足した。この会は、住民のききこみ、企業のききこみなど、事実をひとつひとつ掘りおこし、米軍資料にもあたり、地道な活動をつづけている。こうして戦災の犠牲の全貌が明らかにされてきた。「半田空襲と戦争」という大体70頁ないし80頁の冊子が毎年1冊発行されている。2000年7月23日には、第17号が発行された。また、「半田・戦争を記録する会通信」という大体4頁のニュースが毎年数回発行されている。2000年10月1日には、第30号が発行された。また、毎年7月には、「半田・平和のつどい」が会の主催で開かれている。

平成4年（1992年）には、「半田・敗戦犠牲者追悼平和祈念碑建立実行委員会」が佐藤明夫氏を中心に結成された。全国に呼びかけた募金も順調にすすみ、平成7年（1995年）7月23日、平和祈念碑の完成式が盛大に挙行された。全国各地から350人の人々が参加し平和を誓った。半田市雁宿公園^{かりやど}に建立された平和祈念碑は、長さ4.2m、幅3.5m、高さ1mの石壁で囲まれ、内壁には犠牲者432名の氏名が彫られている。毎年7月の「半田・平和のつどい」に先立って、平和祈念碑の献花式も行われている。

会員の著作活動もつづけられている。細山喬司 著「花も蕾の」（1995）や佐藤明夫 著「戦争動員と抵抗」（2000）などはその例である。

本稿を終るにあたり、原稿作製に御協力いただいた、日本福祉大学学長室の友松達彦氏と藤田直子さんに厚く御礼申しあげる。

VI. 引用文献 (ABC 順)

- 朝日新聞 (1942) 朝日新聞東京本社版, 1942. 6. 11. (木) 20, 191号.
- 中部日本新聞 (1945 a) 1945. 3. 22 (木) 号.
—— (1945 b) 1945. 3. 26 (月) 号.
—— (1945 c) 1945. 4. 2 (月) 号.
—— (1945 d) 1945. 4. 19 (木) 号.
—— (1945 e) 1945. 5. 17 (木) 号.
—— (1945 f) 1945. 6. 10 (日) 号.
- 林 茂 (1967) 太平洋戦争. 日本の歴史 25, 中央公論社, 496pp.
- 細山昭司 (1995) 花も蕾の: 中島飛行機半田製作所=動員学徒たちの歌=. 麦同人社, 67pp.
- 飯塚つとむ (1972) 血戦ノミッドウエー・アッツ. 学習研究社, 196pp.
- 鹿児島市学舎連合会編 (1970) 士魂: 薩摩兵児歌. 春苑堂書店, 298pp.
- 加藤周一 (2000) 私にとっての20世紀. 岩波書店, 239pp.
- 菊村 到 (1982) 提督 有馬正文. 光人社, 238pp.
- 黒田清定 編著 (2000) 神統流 (第49回日本泳法研究会). 神統流研究会, 77pp.
- 中村昭典 (1996) 半田動員の思い出. 鹿児島一中第49回生記念誌「地は靈に」IV, p.281.
- 野呂春文 (2000) 半田空襲の爆弾の落下地点 (2,300点) 特定. 朝日新聞名古屋本社版, 2000. 7. 20. 号.
- 小野広一郎 (1996) 知覧の思い出. 鹿児島一中第49回生記念誌「地は靈に」IV, pp.257-259.
- 佐藤明夫 (2000) 戦争動員と抵抗: 戦時下・愛知の民衆. 同時代社, 242pp.
- 園田実信 (1996) 半田動員の思い出. 鹿児島一中第49回生記念誌「地は靈に」IV, pp.74-76.
- 諏訪兼位 (1945 a) 日記 1, 1945. 3. 17.-1945. 4. 20. 手記.
—— (1945 b) 日記 2, 1945. 4. 21.-1945. 6. 17. 手記.
—— (1975) 半田—昭和20年と昭和50年の一. 鹿児島一中第49回生記念誌「地は靈に」, pp.216-220.
—— (1995) 諏訪兼位スケッチブック. 名古屋アートプロジェクト, 79pp.
—— (1996 a) 半田物語. 鹿児島一中第49回生記念誌「地は靈に」IV, pp.71-74.
—— (1996 b) 終戦の時. 鹿児島一中第49回生記念誌「地は靈に」IV, pp.271-272.
—— (1996 c) 少年の日々. 泉 — 次代への贈りもの — (鹿児島編). 星文社, pp.182-187.
- 種村佐孝 (1952) 大本営機密日誌. ダイヤモンド社, 275pp.
- 田良島 昭 (1995) 半田分校四年半卒. 自家版, 75pp.
—— (1996) 漱石の書簡. 鹿児島一中第49回生記念誌「地は靈に」IV, pp.134-135.
- 和田 功 (1996) 半田動員 (出発までの巻) 戦災に焼け残った日記より.
鹿児島一中第49回生記念誌「地は靈に」IV, pp.303-304.